

話である。

二五 茶ッ栗柿麩

士族が零落して今日の糊口が六ヶ敷い様になりましたから。色々相談の上商賣を初めることとなりました。何がよかろう蚊がよかろうと考へましたれご。差當り一攫千金と云ふ様なうまいこともなるものゆへ。八白屋物の荷ひ賣をすることにした。茶と栗と柿と麩とを賣りにあるさ。茶ッ栗柿麩」々々々々云ふて市中をまわりたれご只の壹錢の商賣も出来なんだ。これは定めて何か欠點があるに違ひなるぞれもいまして。老練なる商人に尋ねましたら。「それは御前さんの賣聲がわるいからぢや。

茶ッ栗柿麩と一連に云ふては。何の事やらわからぬから。賣れぬのも最もぢや。明日から別々に云はしやれ。必ず商ひはあるに違ひなる」と云ふた。そこで第二日目には別々に云はねばならぬと思ふて。「茶別栗別柿別麩別」と云ふてあるいた。此日も亦壹錢の商ひもなる。不審に思ふて又彼の商人に話しましたら。商人の云ふに別々にと云へばとて「茶別栗別柿別麩別では薩破離わけがわからぬ。茶は茶で別々に云はねばならぬと教へた。そこで第三日目には大聲をあげて。「茶は茶で別々。栗は栗で別々。柿は柿で別々。麩は麩で別々」と云ふて賣りにまわりたれご此日も商ひはさらになかりたそうなし。

二六 判じもの

私の寺に惠燈大師の四百回を執行した際に、村内の青年が大きな掛行燈をこしらへて門前につりました。表面には布教者が數百の同行を集めて説法してれる相がかいてある。裡面には常陸山とか梅ヶ谷とか云ふ如き力士を書いて。犢鼻褌の結び目の處に錠をしろし。足首の處に小さき提燈がつけてある。これは一箇の判じ物であるが。如何なる意であらうやと皆の者が腦漿を絞りにて考へた。而して其解答は左の如くである。表面の説教は平生業成の教義を傳へてれるのである。裡面の力士の足首の處に小さき提燈がつけてあるは。足元のあかるい内と云ふこと

犢鼻褌の結び目に錠のつけてあるは。けつちやう(決定)の意味で。足元のあかるい中に決定せよと云ふが平生業成であると云ふことを書いた判じものでありたのである。

二七 酒の糟

常識のなる息子が涙ながら母親に訴へますには「ね母さん今日私 は集會の席へ出ましたら、或人が私に向ふて。貴様毎晩酒を呑むかと尋ねましたから。私は酒は此頃高くてく呑めぬから。其かわりに酒の糟を食ふてれるのぢやと答へましたら。皆の人が大笑ひして。酒は高いからうまいのぢや。其うまい酒をよようのますして酒の糟食ふてれる様な甲斐性なしでござうなる

かど云ふて。散々に冷評されました。私は残念でく〜なりませぬ」と云ふた。母親は之をきいて、「御前の様な有の儘のことを云ふものぢやなるよ。此頃は無暗矢鱈に外觀をてらう時節だから。内では味噌をなめて居ても。鯛のれ作り食ふた様に法螺を吹くのが當世だ。それだからこれから後にもし人が酒を飲むかと尋ねたら。正宗を樽で取りて毎日之を吞でれると答えるのだよ」と教へました。次の集會に出た時に。酒糟先生く〜と云ふて皆の衆が冷評から、「イヤ〜」。僕は此頃正宗を樽で取りて毎日之を吞でれるのよ」と母に教へられた。進り申しました。「ソレハ大成張だ。今日は何程吞んだか」と尋ねたから

「三枚食ふた」とれもはず答へた爲め。とう〜化の皮があらはれて又々一層ひどく笑はれた。家に歸りて其委細を母に話せば「それは御前やはり正直すぎるからいかなるよ。何程吞んだとさかれたら。五合吞んだと答えるのだよ」と智慧をつけられた。第三の集會に出た時に。例の口のわるひ友人が「どうだ今日も正宗三枚食ふたのか」と冷評し始めるから。「今日こそ實際に正宗五合吞んで来たよ」と云ふた。「それは妙だ。冷で吞だか爛をして吞だか」と云ふたら、「イヤヤ焼て食ふたよ」と答へて。又々馬脚をあらはした。

二八 千圓と三文

「人毎に一つの癖はあるものを我にはゆるせ敷島の道」と云ふ
 古歌もあり「なくて七癖と」云ふ俚諺もある位だから、少々の
 癖のあるは最ものことなれど。貴公の様に人の持てたる品物に
 直段をつけて。此時計は何圓ぢやとか。アノ蝙蝠傘は何圓ぢや
 とか。事々物々に直ぶみするは人の感情を害するものはなる
 から、以後は少しく注意し玉へ」と忠告しましたら、其男は大
 に喜んで「イヤもう君なればこそよう注意して下された。實に
 難有い。君の只今の御忠告は實に千圓の價值がある」云ひまし
 た。「ソレ／＼直段を入れなと云ふ忠告に直に直段を入れて。千

圓の價值があるなと實に失禮千萬なことを云ふ人ぢや。それ
 が全體いかなるから其惡癖を矯正してもらいたいと。僕もいろ
 く苦心したけれど。君の様な人物はもう駄目だ。どう云ふて
 も仕方がある。無宿善力及ばずとは眞に此事だ。以後は敢て忠
 告の一言も呈しませぬから。勝手にし玉へ」と云へば。「千圓の
 價值があると云ふたかどて。ソウ／＼立腹して下されては何と
 も申し様がある。只今の様にゆはれてみりや。僕はもう三文の
 價值もなぬよ」と云ひました

二九 土繩買ひ

山寺の和尚が小僧に云ひつけて土繩買ひにやりた。外の物へ入

れると人に知らるゝといかぬからとて。徳利の中へ土繩を入れ
て来いと云ふて徳利を持って買ひに行た。小僧は和尚の云ひつけ
通り土繩を徳利の中へ入れて山寺へかへる途中で。學校戻りの
小供に出遇ふた。「小僧サンそれ何だエ」と尋ねるから「云ひ當
てゝ見なされ。ゑらいものだ」と云ふた。「酒か」「否」「酢か」
「否」「醤油か」「否」。「よう考へて云ふて見なされ。もし云ひ
當てたら其褒美に。此徳利の中の土繩三疋あげるよ」と云ふて
どうぐく自白してしもうた。

三〇 下女れ竹と平林

下女のれ竹は旦那から横町の平林へ此手紙を持ってゆけよと云ひ

つけられた。ハイ承知致しましたと返事をこゝろ宅を出ました
が。平林と云ふことを忘れてしまつた。状態の中の手紙には前書
がしてあれど。眼に一丁字もなきなさけなさ手紙は見てもよむ
ことが出来ぬ。幸ひ其近邊に工事がありて澤山な大工が集りて
仕事してれる。其處へゆいて手紙のうわがきを見てもられうと
れもい。大工の處へまいりました。「大工さん誠に御氣の毒です
がこの手紙の宛名をどうか御讀み下され」とたのみましたら。
甲曰くこれはひらりと云ふのぢや。
乙曰くイヤくへいりんぢや。
丙曰く上な字は一の字と八の字と十の字の三字集りてれるから

「二八十」ぢや。下な字は草木の木の字が二つ并んでれるから、
「もくく」ぢや。それでこれは

「一八十」のもくく」と云ふことぢや。

丁曰く上の字は一して八して十と云ふ字。下の字はきの字が二
つあるから。それでこれは「一して八して十ツ木木」と云ふこ
とぢやと教へた。下女のれ竹は四人の大工の答へが四通りにな
りたから。それが本眞のやらそれが嘘のやらわからぬ。けれど
下手な鐵砲も數うてはあたる」と云ふ俚諺もあるから。此四つ
の中にはどれもが本眞に違ひなぬから。四つなら一時に云ふて
尋ねてみよと思ひまして、「ひらりんかへいりんか。一八十のも

くもく。一して八して十ツきき」と叫んで横町中を尋ねま
わりたれど。とうく知れななた。

三一 石工の望み

石工が山で石を切りてれると通行の巡査が之をどがめて、「コリ
ヤ」石工。それは甲の山と乙の山との境石ぢや。境石を切る
ことはならぬ。もし本官の命令を用ゐぬれば法律に問ふぞ」
と云ふて大に叱りました。石工は低頭平身それ入りましたの
一天張で其場はすみましたが。さて石工がれもうにはナント巡
査と云ふものはゑらいものぢや。世界中に巡査ほゑらい見識
もつたものはあるまい。ねれも一生石工の職人ではてるより何

でも巡査はどなるゑらいものになりたいと友達の處へ相談にゆきました。處が其友達の申しまするに。「御前は巡査はどなるゑらいものはなると云へど。巡査の上には警部と云ふものがありてこれは判任官で中々ゑらいものぢや。巡査などは警部の前へ行たなら丸でひるに鹽かけた様なものぢや」と云ふた。石工は「そんなら已れは其警部になろか」。友達の云には「警部の上には警部長と云ふものがありてこれは奏任官で中々ゑらいものぢや」と云へば「そんなら已れは其警部長になろか」。「イヤ〜また其上には縣知事と云ふものがある。これは勅任官で中々ゑらいものぢや」。そんなら已れは其縣知事になろか。」「イヤ〜また

其上に大臣と云ふものがある。これは親任官で中々ゑらいものぢや」。そんなら已れは其大臣になろか。」「イヤ〜また其上には上御一人の天皇陛下と云ふがある。これは日本五千萬の同胞の一人子の如くあわれんで仁政を行ふて下さる。夫に此頃は世界の強國と威張りてれりた露國をメチャ〜に攻めつくしたものぢやから。世界第一の天皇様と云ふは我日本の御天子様ぢやが。其御天子様の上でも遠慮會釋なく御通りなさるゝは太陽ぢや」と云へば。「そんなら已れは太陽になろか。」「イヤ〜太陽は世界中を御照しなさるゝなれど黒雲にはかなわぬ。黒雲が邪魔をすると太陽も其光りを失はるゝで。黒雲と云ふ奴はさ

ついで奴ぢや」と云へば。「ソシナラ已れは黒雲になるか」。「イヤ
 く黒雲よりただきついは雷ぢや。雷は黒雲の上を縦横無盡
 に飛びまわる」と云へば。「そんなら已れは雷になるか」。「イ
 ヤ其雷も時々黒雲をふみはづして落ることがある。石の上な
 どへ落ると云ふと大きな怪我することがあるから。雷よりはま
 だ石がゑらい」。「そんなら已れは石になるか」。「イヤく其
 石も石工と云ふものがありて。見付け次第にぐづく切りてし
 まう」と云へば。石工は「なるほどそんなら矢張元どの石工が
 一番ゑらい」と合點したと云ふ話しがある。

三三 乙藏の詭辨

甲作乙藏の二人が其友達たる丙助の宅へ遊びに行た。甲作は途
 中で五拾錢の羊羹を求めて手土産に持て行たが乙藏は中々の客
 齋家ですから只の參錢も土産物は買ひませぬ。さて二人がつれ
 て丙助の宅に至りましたが主人は歓迎して座敷へ導いた。甲乙
 兩人は座敷へ通りて主人に挨拶する。甲作が「御粗末なれど御
 土産の印まで！」と云ふて羊羹を出す。主人は「御難有う
 御座る」と御辭儀する。甲作は「れ耻う御座ります」と云へ
 ば。乙藏も同じ様に「御耻う御座ります」と云ふた。主人が
 勝手の方へ行たあとで。甲作は乙藏に向ふて「君は何と云ふ狡
 猾なことをなさる。今日僕が土産に持て來た羊羹は。君も承知

の通り五拾錢出して求めたのぢやが。夫に君が御耻う御座り
ますと云ふたばかりで。君と僕とが貳拾五錢づゝ出し合ひで買
ふて来たことになりてしまふ。甚だ君はつまらぬことを云ふ人
ぢや」と非常に怒りました。乙藏は之を聞いて、「甲作様それは
御前が心得違ひと云ふものぢや。全體君は五拾錢で羊羹を求め
て来られたのでせう。其五拾錢で羊羹を求めて十産物持て来た
君でさね御耻かしく御座りますと云ふもの。僕の様は何も持た
ずに来たものは尙々耻かしくてなりませぬから。そこで僕も御
耻う御座りますと云ふたのぢや」と詭辨を弄して誤摩化した

三三 小僧の豆腐買

山寺の和尚が大層豆腐がすきな爲めに。毎日々々小僧が籠をさ
げて豆腐買ひにやらるゝ。さて山寺の事であるから小僧が長い
大門通りを出掛てゆくと。門前にいやなねかしい老爺さんが住
んで居る。この老爺さんが小僧が通るといつでも問答を仕かけ
る。「小僧何處へゆく!」「町へゆく!」「町へ何にしに行く!」
「豆腐屋に行く」と云はなると其處を通さぬと云ふ始末で。終
には小僧も毎日の問答で同じことを云ふのであるから怠屈で厭
になりた。或日の事でありたが例の如く云ひつけられた。そこ
で小僧がいやな紛れに毎日門前に老爺さんが居りて私を苦し
め問答をせんければ通さなる事情を和尚様に話した。ソースル

ト和尚が、「ヨシ、それぢや私がよい問答を教へてやる。それはこう云ふ問答である。小僧何處へゆく」と云ふたならば。西方へ行く」と云ひ。西方は何處へ行く」と云ふたら。極樂へゆくのだと答へるのだ」と教へられた。小僧は之を聞いて、「それは面白いこれから行つて老爺をやりこめよう」とたまふて勢ひ善く行つた。老爺さん相變らず「何處へ行く」と問ふた。直に小僧「西方へ行く」とやツた。老爺は又「西方は何處へ行く」と問ふたから。小僧「極樂へゆく」と答へた。老爺は「昨日と返答が違ふから少しれかしいと思ふて。第三番目に「極樂へ何んしに行く」と問ふた。サ、小僧も其返答にまごついたる。

三四 兩肌をぬぐ娘

第三番目は和尚より教はらなる。仕方がなるものであるからと云く、豆腐買ひにゆくと云つてしまつた。これは半分きいて分つた様な顔をして其實際はわからずになれるものを戒めた話である。

さる所に十六七の娘をもたれたが。せたけのびたれは親達も心がせく。又時分の娘なれば諸方から貰ひに来る。或時母親が娘をよんで云はるゝには、「方々から貰ひに来れどもこれぞと思ふ縁もなかりたに。此頃二軒から云ふて来た。これは随分相談してもよかろうと思ふ。一軒は金満家なれどト聲殿が見ぐるし

いげな。又一軒は聳殿は品もよくよい人がらなれども財産はう
 すと云ふことぢや。さりながら二軒共聳殿の氣象は實體など
 云ふこと。何よりこれは難有い。この上はごちらへなりとも其
 方の氣に入りた方へ嫁入さそう。コレ返事をしやれ。ハ、ア耻
 かしいのか。それなればよいことがある。金満家の方へゆきた
 くば右の肩をぬぎや。よい聳殿の方へゆきたくば左の肩をぬい
 て見せや。其間私はこちららむいてれる」と。母御がうしろむか
 れたれば。娘は心得。肩をぬいた様子。母親がもうよいかぞれ
 しくとふりかへりてみれば。娘は両肩をスツパリトぬいで居ら
 れた。この娘の両肩をぬいた心は。晝は金満家の處へゆき夜は
 よい聳殿の方へゆくつもりとみわる。さても油断のならぬ娘御
 で御座ります。

三五 九年 甫

或家に田舎のぼうの丁稚がござりました。九年甫を親類へ持て
 ゆけと云ひつけられて有馬籠さけた門へ出ました。路々の思
 案に九年甫と云ふものは田舎ではきかぬ名ぢや。ごの様なもの
 をと蓋を取りて除いてみれば。ついに見たこともなぬうまそう
 なもの敷がよんで見れば九ツある。さてはこれで九年甫と云ふ
 のぢやなとハヤ合點して。忽ち一ツたもとへかくし。残りを持
 て先方へ行き。つかひの口上を云ふて。此八年甫を御目につけ

ますと申たれば。取次の女中がびっくりして。何を云ふてぢや
これは九年甫ぢやと云ふ。丁稚もさてはあらはれたか。たも
とから一つ取出し。實は一年甫をかくしましたと敷い顔をしら
れた。

三六 本眞の近道

近道を好む人がありました。或時一人旅をせられたか。途中に
於て尾籠な話ぢやが急に大便を催した。時計をみれば十一時。
今一ト息あるいたら次の宿まで行くのぢやに。困りたものぢや
大きに隙が入ると餘程の道を損をせにやならぬ。ドウゾくあ
るさく用を便する仕方はなるか。色々近道を考へても。小便

と違ふて大便は都合がわるい。とかくする内ますます急になり
て来る。詮方なして路傍の野雪隠へ走りこみ。恣に黄海に跨り
ながら。これはつまらぬ。斯う際どりて居ると大分道がれくれ
る。どうぞ仕様はなることかと勘考をしたが。忽ち一の近道を
思ひついた。と云ふは外ではなる。時は晝前。今こゝで隙を入
れて。又むこうの宿で晝仕度すると。二重三重の休息になり。こ
とさら茶代も入りて不経済ぢや。それによりて斯うしてれる間
に懐中の辨當をしてやると。二重やすみもせず。茶代も入らず
至極よい近道ぢやと。握り飯取り出し。蒞ぎれの隙間から茶種
圃を遠見して悠々と食ふてられた。さて樂あれば苦ありぢや

氣の毒なことが出来た。山蜂の大きな奴が彼の雪隠へ飛こんで
 大事の所をさしねりた。びつくりして蜂はらう拍子に。手にの
 せた皮包みの握り飯をれもはず野壺の中へ取れとして。又びつ
 くりし。暫くのぞいて居られたが。横手を打つてハ、アこれが
 近道ちやと云はれた。これは實に面白い話で。握り飯をかみこ
 なして喉を通し腹を通し而して後下へれとすのでござりますが
 夫を手のひらから直に野壺へれとしたものゆへ。弓と弦はごち
 がう近道で此程の近道はなる。こゝが大事の聞どころで御座り
 ます。近道は近道なれど喉を通さぬと握り飯が實にならぬ。ま
 はり遠い様でも本街道でなければ近道は役にたゝぬ。金儲の近

道をして相場にかゝり出世の近道をして山師となり婚禮の近道
 は野合葬式の近道は鐵道往生。斯くの如きはすべて功を奏する
 ことは出来ないのである。

三七 不孝息子

不孝の息子がありて母親の手にあわぬ友達が氣の毒がりて。さ
 る先生の方へ道話を聽聞につれてゆきました。其夜の道話に昔
 或國に孝子がありて家貧しい。しかるに親子共大病にとりあい
 腰がぬけて立つことが出来ぬ。已に餓死にも及ぶ所に孝心の程
 天の感應ありしにや。隣の鶏がある日土の塊りくわねて來
 てかの孝子の枕元にはこぶ。不思議にれもい碎きみるに古金一

歩を得たり。これを初めとして日々に運ぶ。遂に此金を以て薬を求め本復してあまツさね残る金を資本として家をねこしたりと云ふ話を。不孝者大に感心してきいて居ましたが。内へ戻りて母親に云ふには。それ程に孝行する程に。雞を二三羽買ふて来て下されと云ふ。母親よろこび「孝行はうれしいが其雞は何にするのぢや」。「ハテさて買ふて御座れと云ふに。跡でしれることぢや」。「それでも雞が孝行になりそうなることはなる。殊に此米の高いに」と半分云はせず。「ハテやかましい。こなたの様に小言云ふて孝行も出来るものぢやなる。老ては子に順へぢや。行て買ふて御座れ」と云ふに母親も詮方なく雞を二三羽

買ふて来た。そこで息子はうれしがり舌つゝみ打て鶏を呼び餌をやりながら。「これ母者人そちら向ツしやれ脊中さすりてあげよう」。「イヤ〜私 は肩がつかへはせぬ」。「又こなた小言を云ふだまつて肩を出さッしやれ」と無理無體に肩をさする。鶏が裡へゆくと酒呑んで寢てれる。とかくして三十日ばかりもたちもう鶏が土くれをくわけて来そうなものごと毎日までもしるしかなる。不孝者大に氣をいらち。さりとては目のあかぬ鶏ぢやこれほどに孝行するのがれのれが目にかゝらぬか。よいかげんに目をさませと鶏をつかまへて述べ懐いふ。鶏も氣の毒に思ふたか。或日土の塊をくわへて来る。息子は悦びこれは大分大

きなかたまりぢや。金貨であるうか小判であるうかと碎いてみ
たれば。蚯蚓が出た。不孝者肝をつぶし。ナンボ時節柄でもせ
めて銀貨ぐらいはありそうなものぢやに。此ざまは何ぢやとに
らみ付けて叱りますれば。鶏も疝癪にさわりたやら。大きな口
あけて。ベツカコウと鳴きました。

三八 大黒と貧乏神

或年の元日に。村内一等の金満家の門前で人がワイ／＼泣く聲
がきこえた。エ、元朝早々から縁起のわるい忌々しいことぢや
と主人は顔をしかめながら。回禮に出かけましたが「元日やあ
ふ人毎に御慶かな」で。あちらこちらとかけめぐり其歸り路に山

寺へ立寄り。紋切形の挨拶をのべ序に右の始末を具さに申上た
れば。和尚の云はるゝには「それは機に御かけなさるな。却て
貴方の御家の繁昌する瑞相であります」と云ふて。

大黒に貧乏神がれい出され
門の外にはワイ／＼と泣く

と一首の歌を詠まれたれば。主人は横手を打て大に喜ひ。「丸い
卵も切り様で四角とはホンに此事で御座りますナア。物は取り
様思ひ様。ケ様な結構な御歌を頂きますれば今年は私の家の
ます／＼繁昌する前兆とは。ヤレ／＼目出度ひ／＼。これで今
朝からの心配はサラ／＼となくなり。溜飲の下りた様な心地が致

「します」と屠蘇酒の四五杯ものみ過し微酔機嫌で我家へかへり。座敷へ上るや否、「コリヤ女房。今朝あの門前の泣き聲を聞いてそちには何とも云はなんだが。實は元朝早々からいやな事ぢや。今年は何んぞ不時の災難がなければよいがとれれば内々心配して居たが。今山寺の和尚様の歌をきいて大に安心した。サア聞いてくれ斯う云ふ歌ぢや。

大黒が貧乏神に会い出され

門の外にてワイ／＼と泣く

ナント目出度いことぢやないか」と云へば。女房は怪訝顔。「旦那様それが何で御目出度御座んすね。大黒が貧乏神に会い出さ

れたら貧乏するより外はありませぬ。門の外にてワイ／＼と泣くなごとし。コンナ縁起のわるいことはなぬ。ア、私は悔しい／＼と」云ふて両眼からポロ／＼と涙こぼれてる。主人も成程と首を傾け。「ほんに今山寺で聞いた時には大層目出度い歌ぢやと思ふたが。今御前の云ふことをきいてみれば如何にも縁起のわるい歌ぢや。サテハ和尚に一本くわされたか。コリヤ此儘にはすまされぬわい」と血眼になりて山寺へかけりてゆき。和尚に其事を話すと和尚はアハ……と大に笑ひ。「御主人餘程屠蘇酒がまわりてられます。貴方はこののに字とがの字との付け様を間違はれたから目出い歌が縁起のわるい歌となりた

のです。にの字を大黒につけて。大黒に貧乏神がねい出されどよめば目出度い歌となりませんが。夫に貴方は貧乏神ににの字をつけて大黒が貧乏神にねい出されどよまれたから縁起のわるい不祥な歌となりたのです」と話されたら。今の主人はナール程と合點して喜びく我家へかへられたと云ふ滑稽談がある。

三九 百圓の懸賞

物好きな散髪屋がありたが。百圓の懸賞で發句の募集があるとさく。八錢や拾錢の端錢ばかり儲て居ては到底甘い酒ものめぬから。發句で百圓儲けようと思ひ。毎日々々仕事する時も飯喰ふ時も小首かたげて一生懸命に考へて居る。そこで内の女房が

見兼て、「其様にねてもれきても心配ばかりして御座れど。私の子を産む時の心配ほごでもなからう」と云へば、「イヤくそうでなる。御前が子を産むよりもまだ六ヶ敷い。なせならば子を産むのは腹にあるものを出すのなれど。ねれが發句は腹になることを云ふのぢやで。中々子を産む處ぢやなる」と女房を叱りつけたと云ふ話がある。

四〇 堪忍の二字

學問のある人が無學のものに向ふて、「人間は堪忍の二字を守らねばならぬ」と申しきかせましたら。無學の者は頭を傾け指折り數へてねりましたが、「先生カンニンとは四字で御座ります。

すると忽に見る様になると。やがて療治にかゝり。難なく目の玉をぬき出して焼酎であらい。つるし柿をほす様にこの眼の玉を筭にかけて干してれかれた。時に氣の毒なことが出来ました。屋根に居る鳥が見付けて目の玉を一ツくもへて逃げました。其羽音にねごろき醫者殿が見付けて肝をつぶし。これは困りたことが出来た目の玉が紛失しては病人へ云ひわけがなる。どうしたらよかろうと工夫して居られたが。工夫もあればあるものぢや。側にねて居る犬の子を見付けて。これは屈竟なものがある。この犬の目の玉を借用して病人を本腹さそうと。忽ち犬を股にはさんで苦もなく犬の目の玉をぬき出した。犬こそ迷

惑。キヤン／＼云ふて舞ひあるけど。醫者殿はれさまりた顔でこれも焼酎であらひよく干して。鳥の残した人の目と一對にしてやがて病の目の中へはめますと。奇妙に目がみね出した。病人は大によろび。犬の目のまじりてあるとも知らず。キヨロ／＼してうれしがる。醫者殿もれかしさを隠して。「どうぢや見るにかわりましたことはなるか」。「イエ／＼何も變りましたことは御座りませぬ」と云ふ。何ぞかわりましたことがありそうなものぢや。よう氣をつけて見さッしやれ」と云はれて。「成程そうれッしやると少しかわりましたことがござります」。「そうであらう／＼どうかわりました」。「ハイ只今雪隠へまいりまして下をの

ぞいた時。右の目ではきたのうみね。左の目では何このうこのもしく思ひました」と云はれた。好もしい筈ぢや。左の目は犬の目ぢやもの。

四二 蜘蛛あしらい

旦那殿が臺所に居眠りしてれる長吉を呼びれこして。「コレ長吉御客様がモウ御歸りなされた。奥にある酒や肴を臺所へはこんだがよゐ」。長吉は眼こすりく。ふせうぐに返事しながら奥へ行てそこらを見れば。硯蓋やら小鉢やらうまいものゝ勢ぞろい。こわいものぢや。誰が催促もせぬに目の玉がさよろつき出し。何ぢやこれは甘まそうなものかたんとある。硯蓋は鶏卵の

巻焼き。たつた一切しか残りてなる。よう喰ふ客ぢや。こいつは何ぢや。ハ、ア蒲ばこぢやそうなと一とされつまんで口へはうばり。側をみれば飯蛸が七ッ八ッ南京のごんぶり鉢の中で車座に座禪してれる。こいつはうまいとつまむ處へ旦那の足音。これではならぬと袂へ押しこみ銚子盃をうつ伏てとる拍子に飯蛸が袂からコロくところんで出た。旦那自はやく見付けて「それは何ぢや」と詰問した。長吉はぬからぬ顔で疊をたいて。「れとつい来い」と申しました。何程蜘蛛あしらいにしても。飯蛸は蜘蛛には見へぬ。隠れたるよりあらはるゝはなしぢや。

四三 老人と金米糖

町内に婚禮ふるまいがありました。なにが御年寄をはじめ町役家持の人々一同座につきまますとさま／＼の馳走がある。時にかの年よりは酒さきいては笹の露にも酔ふ程の下戸ぢや。座中をまわる盃の間退屈そうにして居られると。亭主方が氣の毒にねもひ。「ね年寄さまは御酒はめしあがらず御退屈にござりませう。チト御菓子なりと御取り下されい」と。南京の古染付の壺に大りんの金米糖をいれて年寄の前へ持ってくる。坐中も「これはよい御心付き平に御菓子を召上られよ」とすゝめられて。年寄もわるうはなし。「しからは頂戴致しませう」。壺を膝へ引きあげ

手首を突込しなにしきしむ様にねばれたが。無理に手をさし入れてつかみ出そうとするに手首がつまつてぬけませぬ。どうぞぞしてぬけるかとイロ／＼にこじまわしてみても引ばつて見てもぬけず。マゴ／＼して居らるゝと側から見付けて。「どうなされましたぞ」。「イヤ手がすこしつまりまして思ふ様にぬけませぬ」と眞顔になりて云はるゝ。「ソレハ氣の毒。私が壺を持って居ませう。無理無體に手を御引なされ」と一人が向ふへまわりて壺をつかまへ。あとへ引くと年よりは手を前へ引く。互にエイヤと引あふ有様。座中が一同にドツと笑へど年寄は中々笑はず泣顔になりてどうもいたんでぬけませぬと云ふ。サア是から大

騒ぎになり。醫者殿を呼んでこい。難波骨つきではゆくまいか
 酒宴の興もさめはてました。時に一人すゝみ出で。「いづれも御
 騒ぎなされな。我等うけたまわりた事がある。昔司馬温公と云
 ふ人幼きとき大勢の小兒と共に大きな壺のほとりに遊びました
 が。一人の小兒あやまりて彼の壺の中へはまりました。大勢の
 小供はこれを見てにげかへりたが。司馬温公はかへらず。手ご
 ろの石をとりて彼の壺へ投げつけましたれば。壺はわれてはま
 った小供は不思議に命助かりましたと或人の話ぢや。今御年寄
 の御難澁はこの話によう似てある。イデヤ我等が司馬温公とな
 りて。たとへば其古勢付の壺は失禮ながら何程高金の品でも御

年寄の腕にはかへられぬ」と。しかつめらしくさせるを引さげ向
 ふへ回れは。年寄は氣の毒そうに壺をかぶつた手をつき出すと
 只一打にうち碎た。なにが座中は金米糖がちらかつて雪をふら
 した様になると。「ヤレ御年より御助りなされたか」と其手を見
 れは。ぬけぬこそ道理なれ。金米糖を一杯つかんで居られたと
 申すことぢや。つかんだものを離しなすれば自由自在に手は
 ぬけるものを。一度つかんだら首がちぎれてもはなすまいと意
 地な生れ付き。それで自由自在の大安樂が出来ぬのぢや。

四四 榮螺

榮螺と申す貝は手丈夫な手厚い貝でしかも丈夫な蓋がある。そ

こでアノ榮螺が何ぞと云ふと。内から蓋をヒツシヤリしめて丈夫な事ぢやと思ふてれります。鯛やすゝきが羨しがりの「コノ榮螺や御前の要害は大丈夫なものぢや。内から蓋をしめたが最期。外から手がさせぬ。さりとして結構な身の上ぢや」と云へば。榮螺が髯をなで、「御前方が其様に云ふてくれるけれどあまり丈夫なこともなる。しかしながら斯うしてればまんざら難儀なこともなる」と卑下自慢をして居るとき「ザツフリ」と音がする。榮螺が内から急に蓋をしめてジツと考へて居ながら今のは何であるかしらぬ。網であろうか。釣針であろうか。是ぢやに依て要害が常にしてなるごうもならぬ。鯛やすゝきは

取られたか知らぬ。さても心もとなむ事ではある。したがれればマア助りたど兎角する内時刻もうつり。モウよかろうとソツと蓋をあげ。あたまをヌツとあげてそこらを見回せば。何となふ勝手が違ふ様な。よくく見れば魚屋町の肴屋の店に。此榮螺十六文と正札付になりて居ました。

四五 鹿の鳴き聲

平素から心易い友達が五六人云ひ合せ。或る山寺に心易い和尚のあるを幸ひに。酒辨當の用意をして鹿の鳴き聲をまゝにゆきました。山寺の客殿を借受けてごまりがけの遊山。鹿の音をまぢ兼て。歌をよむ人。詩を作る人。發句俳諧など各得意にや

つて。夫から酒辨當を開いてさしツれさへツ酒宴を開きました
 が。肝心の鹿はトンと鳴かぬ。八時になりても十時になりても
 鹿の音は一切聞ぬ。これはどうぢやモウ鹿が鳴きそうなもの
 ぢやとまでごもく鳴かず。そろく眠氣は催して来る。詩も
 歌もいやになりあくびにうき世話もとぎれ皆默然としてれる。
 中に五十はかりの男はそろく息子の放蕩をなげきかける。そ
 うすると一方の男は番頭に損をかけられた話をする。親戚に無
 心をゆわれ借金の保證に立つて損をした話。姑と妻との中裁
 に苦勞する話。種々雑多の柵れろしで夜のふけゆくも知らなん
 だが。其中の一人が氣がついて。「ホンニもう鹿が鳴きそうなもの

のぢや」と椽の障子を引さあけてみれば。大きな鹿が庭先に黙
 然としてれる。「これはどうぢや。そこに居るならなせさつきか
 ら鳴かぬぞ」と云へば。鹿がぬからぬ顔で。「イエく私しは御
 前方のなくのを聞きに來たので御座る」と云ふた。

四六 うろたねた蛙

京に住む蛙がかねて大阪を見物せんと望んで来りましたが。此
 春れもい立て難波名所見物と出かけ。ノタノと這ひまわり。
 西の岡向ふの明神から西街道を山崎へ出で天王山へ上りかゝり
 ました。又大阪にも都見物せんと思ひ立つた蛙がありて。これ
 も西街道を高槻山崎と出かけ天王山へのほりかゝり山の嶺で

両方が出合ひました。ナニが御互に仲間同志なれば面々の志を咄し。扱両方が云ふ様は。此やうに苦い目をして漸々どまだ中程ぢや。是から御互に京大阪へゆきなば。足も腰もたまるまい。こゝが名にれふ天王山の嶺。京も大阪も一面に見渡す處ぢや。ナント御互に足をつまだて脊のびして見物したら足のいたさを助かろうと。相互に相談をきわめて両方がたちあがり。足つまだて、向ふをキツと見渡して。京の蛙が申しまするには。音に聞けた難波名所も見れば京にかはりはなる。術なる目をして行ふより是から直に歸ろうと云ふ。大阪の蛙も目をパチくしてあざ笑ふて云ふ様。花の都と音にはきけご。大阪に少しも

ちがわぬさらば我等もかへるべしと。双方互にれわかれして。又のさくと這ふてかへりました。これは蛙は向ふを見渡した心なれど。目の玉が脊中についてあるゆへ。ヤツパリ古郷を見たのぢや。何ぼほごにらんで居ても。目のつき所に氣がつかぬうろたねた蛙の話。

四七 畫工の自惚れ

金満家の主人が畫を學びまして自稱天狗の鼻を高くしてねりました。自分の畫に立派なる表装をせさるにやりて楽しんで居た。或時市内を散歩せしに自分の書いた畫の表装したのが古物商の店頭に出てねりました。主人は知らぬ顔して市價の評判を聞

これもひ、「此畫何程であるか」と云へは七拾錢であると答へた
自分の畫の高直なるを喜び、「五拾錢にまけよ」と云へば、「イヤ
まかりませぬ。此表装は實に壹圓の價値がありますれど、中の
畫がわるいゆへ七拾錢と云ふたのです」と。もまつけに云はれて
天狗先生も大に閉口せられた。

四八 禪宗の和尚と梨一個

禪宗の和尚隣家より梨一個をもらへり。三人の小僧に向ふて云
はるゝには、「切りとうももあり切りとうもなし」の上の句をつけ
よ。其成蹟の良好なるものに褒美として此梨を興ふべしと。三
人の小僧は各智囊を絞りて左の如く云へり。

第一の小僧曰く。

筆の軸かけごのふちにかゝるだけ……………

第二の小僧曰く。

月かくす松の小枝がかさなれば……………

第三の小僧曰く。

梨一つれしむ和尚の生首を……………

四九 二十四孝と饅餡一ぱい

親不孝の悪漢がありましたたが其友人が。之に忠告して申します
るには。御前なせ其様に親を粗末にするのぢや。昔二十四孝の
中には寒中に筍ほりて親にくわせたり。氷をたゝきわりて鯉

を取りたりして親の望みをかなへたる人がある。御前も少々見
倣ふて孝行するがよい」と。諄々と異見せられて大に感心しま
した。家へかへりて「お母さん、荷ほりて来ませうか。鯉とり
て来ませうか」と申しますると。母は叱驚して「此寒中にそん
なものがあるものか。それ程に云ふてくれる親切があるならば
餛飩一ぱい食はしてくれ」と云ふた。息子は大に立腹して。
「ナニこの腐れ婆々奴。二十四孝の中に餛飩食ふた親がごこ
にある」とにらみ付けたとある。

五〇 盲人と提燈

盲目が一人旅をして心易い旅籠屋に宿り。あすの朝は午前四時

立をさして下されとたのむ。亭主も心得。朝早く立たせまする
と。盲目は旅の支度を整へ杖を持って出ようとする。亭主が
云ふには「まだ夜深いに提燈を御持ちなされ御貸し申ませう」。
「何を云はッしやる盲目が提燈を持って何にするもので」「イエ
〜御前には入りますまいけれど。暗闇をとぼ〜と御出なさ
る〜と往來の人がゆき當ります。それで提燈を御持ちなされ
いと申すことちや」「成程ソウヂヤ。私は行當らねども。得て
目あきがつき當る。左様なら御貸し下されい」と提燈をさげて
道五六町出ました。所が向ふから來る人が盲にハタとゆきあた
りました。そこで大きに腹を立て、「これにつき當るやつは盲

目か」向ふの人も疝癪にさわり「オレハ盲目ではなる。そう云ふれのれがど盲目ぢや」。「イエ／＼それは盲目ぢやけれども人には突あたらぬ。オノレが盲目に極った」。向ふの人もいよく腹をたて「オレヲ盲目と云ふ證據は何ぞ覺わがありて云ふのか」「オ、覺わがある。オノレを盲目と云ふ證據は。この持て居る提燈がオノレか目にはかゝらぬぢやなぬか」さつとさし出す提燈の火は。宿屋を出た門口で疾にさわて仕舞てある。ナンと氣の毒な盲目ではござりませぬか。火もともさぬ真くろな提燈をさげて。これでも明かなと思ふて居ると。本心を見失ふて身勝手な心を本心ぢや／＼と思ひ。慎うともれもわぬ人によう似た

ものでござります。

俚 諺

一 三ツ子の魂百まで

大隈伯爵。曾て青年に語りて曰く。予が開國論に傾き夙に英學に志せしは。蓋し七八歳の時に根す。一日。父君の書室に大船異形の圖あるを見て大に驚き。其何物なるやを父君に問ふ。父君の曰く。此れ黒船なり。海外に國あり。土地大にして人多く。文物美をなし。機械精を極め。かゝる巨艦を製造して。能く千里の波濤を渡るものなりと。蓋し父君は當時鍋島家の燈臺

掛にして。能く海外に通じたるを以てなり。伯。此言を忘るゝなく。長ずるに及んで。志を海外萬里の彼岸に放ち。遂に外交官を以て維新風雲の際にあげられたるものなり。三ツ子の魂百までとはこれ是を云ふか。

二 言葉は身の文

左傳の中に介之推曰く。言者身之文也。實に然り。口を開きて物を言ふには。優にやさしく品よきを宜しとす。言葉の品よきは其身の品よきを顯はすものにて。是れぞ誠に身の文なりける。

上杉鷹山公の箴言に曰く。

孝悌忠信の談
壯士義武の談
諫靜論辨の談
和漢名數の談

恭敬退讓の談
大臣名家の談
農事耕耘の談

思ひ出るまゝ是等の物語をあらまほし。

財利損益の談
飲食醉飽の談
奇枝淫巧の談
巫祝呪咀の談

淫奔媒濟の談
解頤新語の談
利口捷給の談

思ひ出るまゝ是等の物語を遠慮あるべき。

三 長者の萬燈より貧の一燈

阿闍世王受決經に曰く。一時佛。羅閱祇園耆闍崛山中に在り。時に阿闍世王。佛を請す飯食已に訖りて。佛。祇洹に還る。王。祇婆と議して曰く。今日佛を請す。佛飯したはりぬ。更に復何か宜からん。祇婆が曰く。たい多く燈を燃せ。是に於てか王即ち勅して百斛の麻油膏を具わ。宮門より祇洹精舎に至る。時に貧窮の老母あり。常に至心ありて佛を供養せんと欲す。而して資財なし。王の此功德を作すを見て乃ち更に感激す。行乞して兩錢を得たり。以て麻油の家に至り膏を買ふ。膏主曰く。母人大に貧窮にして兩錢を乞ひ得たり。何ぞ食を買はずして以て

此膏を用ることを爲す。母曰く我れ聞く佛世には値ひ難く百劫に一たび遇ふ。我れ幸に佛世に逢ふて供養することなし。今日王の大功德を作すを見て巍々無量なり。我が意を激起す。實に貧窮なりと雖も一燈を燃して後世の根本と爲んと欲する者なり。是に於て膏主其至意を嘉みして兩錢の膏を與ふ。二合を得べきに更に三合を益す。凡て五合を得たり。母則ち往て佛前に當りて之を燃し。心に計るに此膏半夕に足らず。乃ち自ら誓て曰く。若し我れ後世に得道佛の如くんば膏當に通夕光明ありて消せざるべし。作禮して去る。王の燃す所の燈或は消ぬ或は盡きぬ。老母燃す所の一燈は光明特に朝にして殊に諸燈に

勝て通夕消えず。膏又盡きず。佛目連に告ぐ。天今已に曉く諸燈を滅すべしと。目連教を承け次を以て諸燈を滅すに。燈皆已に滅てたい此母の一燈三たび滅せとも滅せず。便ち袈裟を擧げて之を扇ぐに燈光益明かなり。

四 金錢は徳義の毒藥

朝鮮の都に兄弟陸間敷暮してれる商人がありました。一日。用事がありて兄弟同道して他所へゆく道にて。弟が金拾圓を拾ふた。これは天の與に辱けなしと云ふて半額即ち五圓を兄に渡した。夫から楊花渡と云ふ渡し場へゆき。兄弟共船に乗りて渡りました。弟は何を思ふたやら拾ふたる金を懷中よりとり出し

水中へ投げこんでしもうた。兄も夫をみると同じく水中へなげ
 こんだ。暫く兄弟顔見合せて無言でられましたが。ヤ、ありて
 弟の申しまするに、「さて〜金銀と云ふものはいやなもの。
 私平生兄様を大切に存じてりましたが。最前拾ふた金をわ
 けてあげましてから俄にれしくなり。兄がなくては此金を一人で
 取るうものと兄を忌む心がきざした。よく〜思へば金ほど不
 祥なものはなぬ。金銀は徳義の毒薬とは真に此事ぢや。兄弟の
 交情を隔てるものぢやと存じましたからすてましたが。兄上の
 すてられた思召は如何でござります」と問ふたれば兄の申し
 まするには「さればの事よ。御前が金拾圓拾ふて五圓わけてく

れたについて。已れも俄かに慾心が起り。御前と同じ様なこと
 を思ふてる矢先へ。御前がなげすてたによりて已れも早速す
 てたのぢやが。云ひ合しはせなんだれご。さすが同じ家庭に育
 ち同じ教育をうけたほごありて。同じ處へ心のついたことこのう
 れしや」と手を打て喜び。夫より一層睦間敷交られたと云ふこ
 とである。これは東國通鑑と云ふ書物の中の話を取意して書い
 たのであります。

五 朱に交れば赤くなる

朱とは丹砂とて赤き物なれば。白き物と之を一所に交われれば
 何時となく染み込みて赤くなること。猶黒きものと同所にれけ

ば自ら黒くなるが如し。されば人の交際にれけるも亦其道理にて。善き友に交れば善き人となり。悪しき友と交れば悪しき人となるなり。されば交はる所の友は十分に擇ばざるべからず。孝經に曰く。友に四品あり。一には華の如き友。謂く好き時には頭に挿み萎む時には地に捐棄す。富貴を見る時即ち附し。貧困なる時即ち捨つ是なり。二には秤の如き友。謂く物重ければ頭垂れ。物軽ければ即ち仰ぐ。與ふる時は即ち敬ひ與ふる無き時は即ち慢る是なり。三には山の如き友。喩へば金山の如し。鳥獸之に集まり毛羽光りを蒙る。能榮の人を富樂同く歡ぶ是れなり。四には地の如き友。百穀財物一切之を仰ぐ。施給養護恩

不徳に厚くする是なり。

論語に曰く。益者三友損者三友。直を友とし。諒を友とし。多聞を友とするは益なり。便僻を友とし。善柔を友とし。便佞を友とするは損なり。

是等の訓言を讀みて以て友を擇ふの標準とせよ。

六 虎の威を借る狐

戰國策の中に曰く。虎百獸を求めて之を食ふ狐を得たり。狐曰く。子敢て我を食ふことなかれ。天帝我をして百獸に長たらしむ。今子我を食はこれ天帝の命に逆ふなり。子我を以て信ならずとせば我れ子の爲めに先つゆかん。子我が後に隨ふて觀よ

百獸我を見て敢て走らざらんやと。虎以て然りとなす。故に遂に之と行く。獸之を見て皆走る。虎獸の已れを恐れて走ること知らず。以て狐を畏るゝと爲す。とあり。今や小狐の徒白日に往來して。其主或は上の威光をたのみて妄りに權を弄し下を虐げ。又之に因りて利を網するもの愈出て愈多し。惡み且つ恐るべきことである。

七 人の振り見て我が振り直せ

みがくべき心の友を尋れば

よきもあしきも鏡なりけり (北條時頼)

人は誰しも我が所行の善惡は能く知れぬものなれど。他人の所

行の善惡は反りてよくみゆるものなり。故に他人の善惡を見ては直に我身に顧み。善事なれば之を慕ひ惡事なれば之を戒めとして。とくと我が見苦しき行ひ振りを改め直すべし。然すれば世の人の善惡ともに我が身の上の鏡となるものなり。

八 燈臺基くらし

燈臺は遠く外を照す具なれども其臺の下は却りて暗きものなり外には隠れなき物事も。其近邊にて聞き合はすれば甚だ分明ならぬこと多し。人の上に於けるも本を忘れて末に走り近きをすて、遠きに求むるが多し。かの射るものゝ的にのみ志して。當りの手前にあることを知らざるが如し。故に世の人達燈臺の

墓の暗きものと知らば。萬の事外に向きて求むべからず。只脚下を照願せよかし。鶴林玉露人集下卷に。尼悟道の詩なりとて左の七絶あり。曰く。

晝日春を尋ねて春を見ず

芒屨踏み遍し隴頭の雲

歸來笑て梅花を燃りて嗅けば

春は枝頭にありて已に十分

九 急がば廻れ

凡そ路を行くに急ぎの用なればとて。知らぬ近道をとりて直に行く時は途中に踏み迷ふて反りて後るゝことのあるものなれば

急ぐ時はまわり遠くとも踏み慣れたる儲なる道を取りて行くべし。萬事の其皆道理にて。餘りに急ぎ立てる時には必ず仕損じのあるものゆへに。火急を要する場合には成るべく氣を鎮め。前後を考へて緩に之を計らざるべからず。

ものゝふの矢橋のわたり近くとも
急がばまわれ瀬田の長橋

一〇 一文れしみの百知らず

一彌猴一握の豆を持ち居たるが。誤りて其一粒を落しければ。手に握りられる豆をすて、彼方此方を探したれども見當らず。其中最前すてし一握の豆は残らず鳩の爲めに啣み去られしと。

凡愚の人も亦復此の如し。初め一戒を犯して之を懺悔する能はず。故に放逸ます。甚しく竟に一切の戒行を喪失するに至る。これ何ぞ一粒の爲めに一握の豆を失ふの獼猴に異ならんや。一文惜みの百知らずとは此事なり。

一 神は正直の頭にやどる

神は正直を以て體となし玉ふ。正直とは心を誠にし行を正くして露だも道に背きたることなきを云ふ。さてかく正直なるものはよく神の冥慮に契ふが故に。神も常に其頭に宿り玉ひていみじき感應あるものぞかし。もし不正直にして心曲り思ひ邪ならば如何に參詣禮拜すとも靈驗を得ること更々なかるべし。古人

歌あり。曰く。

心だにまことの道にかなひなば

いのらすことも神やまもらん

いのりてもしるしなきこそしるしなれ

ねのが心に誠なければ

一二 油斷大敵

油斷をば大敵なりと心得て

堅固にまもれ己がころに (詠人不知)

大般涅槃經に曰く。王。一の臣に勅して一の油鉢を持し經由して傾覆せしむること莫からしむ。若し一滴を棄てば汝が命を斷

つべしと。又一人を遣はして刀を抜て後にあり。随つて之を怖
れしむ。臣。王の教をうけて心を盡くして堅持して爾所の大衆
の中を經歷す。可意の五邪欲等を見ると云へども心常に念言す
らく。我れ若し放逸して彼の邪欲に着せば所持をすて、命全く
濟はざるべし。是の人この怖の因縁を以ての故に一滴の油を棄
てす云々とあり。これ生死中に於て念慧を失せざるの譬喩にし
て。油断の二字これより出でたり。

一三 頭剃るより心を剃れ

凡そ出家が頭の髪を剃ることは、外飾を去り煩惱を断せんが
爲めなり。さるを今時の出家は。頭こそ丸々と剃り磨け。心は
なり。

剃りたきは心の中の亂れ髪

つむりの髪は兔にも角にも (詠人不知)

何故にすてける身ぞとれりくは

姿に耻よ墨染の袖 (慈鎮和尚)

染めばやな心の内を墨染に

衣の色はどにもかくにも (法然上人)

墨染に心の内を染めずして

世わたり衣さるぞはかなき

(最明寺入道)

一四 子ゆへの闇

人の親の心は闇にあらねども

子を思ふ道に迷ひぬるかな

(中納言兼輔朝臣)

人の親たるもの子の愛情に引かされて。知らず識らず其明を
蔽ふるゝことは。宛ら闇の夜に方角を迷へるが如し。さて闇の
夜は物の黑白も見わねば道に踏み迷はんも理りなれど。親の心
の子故の妄愛に迷ひて氣隨氣儘に成長せしめ。終に其子の悪し
きを知らぬぞ淺猿しき。古人も之を禽犢の愛とて。禽鳥の雛
を育み牝牛の犢を舐るに喩へて戒められし。人の親たるもの

思はざるべけんや。

一五 後悔先きに立たず

物事は先きに深く考へたる上にて静に手を下さいれは後に至り
て大に悔ゆることあるものなり。よしや事の過ぎ去りたる後に
て如何に兎や角と悔ゆるとも。ソハ先きに立たざるものなれば
何の間尺にやあはむ何の所詮もやあらむ。されば最初に篤と思
慮を凝らして後悔なき様に爲さるべからず。世の輕卒に物事
を決する人は常に此諺を以て紳に書すべし。

寇準樂公。六悔の箴。

官に私曲を行ふて

失時の悔

富で用を儉せざれば

貧時の悔

藝少ふして學はず

過時の悔

事を見て學はず

用時の悔

酔て狂言を發す

醒時の悔

安くして調攝せず

病時の悔

一六

萬能足りて一心足らず

枝葉よりとかく心の根が大事

萬能よりも一心を知れ

萬能とて萬の藝能あるものは。一寸目には利口なるに似たれども。一心を貫きて一枝に上達せし事なければ。大事難局に當り

ては到底其事に堪ゆべくもあらで必ず失敗を取るものぞかし。世には諸藝に通じたる萬能者は多かれど。大切なる己が一心を知る者は少し。これ皆其本を失ひて末にわしり。其内をすて、外に求むるものなるべければなり。

一七

弘法も筆の誤り

弘法名は空海。延喜の朝。謚號を弘法大師と賜ふ。幼にして異才あり。長して博學遠識。いと書を書き善くす。嵯峨天皇橘逸勢を合せて本朝の三筆と稱す。殊に弘法大師の達筆なること古今に比なしと云ふ。さてかゝる達筆の人なれども或時勅を奉じで應天門の額を書し。已に之を掛けて仰て見れば應の字の上

の點之を欠く。海。乃ち筆を擲て之を補ふ毫も差邪なしと。謂ゆる智者も千慮に一失ありとは此事なり。されば誰か過誤なからん。過誤なきを善しとせで。過誤ありて速に改むるを美とす。改むればれちごとならざればなり。

松の雪拂へはもとの緑かな

一しぐれしぐれてもとの月夜かな

一八 柳に雪折れなし

柳は多く水邊に生ずる樹にて。其枝は垂れて纖弱なるものなれども。雪の降るに随ひ正すものから決して折るゝことなし。温柔なる人はさながら柳の枝の如くなれば。ヨシヤ強暴なるもの

氣色悪しく立ち向ふとも。常に障らす逆はねば其身を傷ふの憂なく。則ち雪の爲めに柳の折れざるが如し。柔能く剛を制するの道理。之を押し擴めて知りぬべし。千利休の歌に。

降ると見ば積らぬさきに拂へかし

雪には折れぬ青柳の絲

一九 人間萬事塞翁の馬

淮南子の人間訓に曰く。近頃塞上の人に術を善する者あり。馬故なくして亡げて胡に入る人皆之を吊す。其父の曰くこれ何ぞ福たらざらんや。居ること數月。其馬胡の駿馬を將いて歸る。人皆之を賀す。其父の曰く。これ何ぞ遽に禍たること能はざ

らんや。家良馬に富む。其子騎を好む。墮て其髀を折る。人皆之を吊す。其父の曰くこれ何ぞ遽に福たらざらんや。居ること一年。胡人大に塞に入る。丁壯の者絃を引て戦ふ。塞に近き人死するもの十に九。これ獨り跋たる故を以て父子相保つ。とあり。この故事より總て善惡禍福の運命が循環して來るを塞翁が馬と云ひ初めしなり。世の中の事すべて斯の如く。強ちに喜び強ちに悲むへくもあらず。得の中に失ふことあり失へる中にも得る事ありて。福も必ずしも福に止らず。禍も永く禍に終らず。詮じ來れば人間萬事輪廻の事である。

二〇 闇夜の錦

闇夜とは月のなき暗黒なる夜中の事にて。錦は五彩の絲もて種々の模様を織り出したるものなり。さて物の黑白も分らぬ闇の夜に。傍を照り。輝す程の錦を身に纏ひたれば。誰かは榮として眼を驚すかものゝあるべき。元來錦は色の愛たき物なれど。闇夜に着たるは曲なき業なるべければ。無用なる虚飾に誇るを闇夜の錦とは喩へつるなり。

見る人のなくて散りぬるれく山の紅葉はよるの錦なりけり (紀貫之)

二一 禍は口より起る

禍の起るは一様ならねども口を慎まざるより起ること多し。

世の中には前後の考へもなく言語を發し舌を弄して他を是非し
思はぬ憎しみを受けて測らぬ禍にかゝるもの昔も今も其例少
からず。されば心あらん人はよく言の葉を慎みて人の心を傷ひ
禍を招くことなき様にすべし。

慎みを已が心の根とすれば

言葉の花もまことにぞ咲く

報恩經に曰く。佛阿難に告く。人世間に生れ禍口より生ず當
に口を護るべし。悪口は猛火より甚し。猛火は熾然として一
世を焼く。悪口は熾然として無數世を焼く。猛火は熾然として
世間の財を焼く。悪口は熾然として七聖の財を焼く。この故に阿

難よ一切衆生は禍は口より生ず。口舌は身を鑿するの斧身を
滅するの禍なりと。古人句あり曰く。

物云へは唇寒し秋の風

口あけてはらわたみせるしいみ貝
質れきの言多きは品すくな

二三 鳥なき里の蝙蝠

蝙蝠は獸に似て獸にあらず。鳥に似て鳥にあらず。畢竟二物を
兼て全體なきものなり。故に鳥なき里にありては蝙蝠自ら鳥な
りと思ひて。時を得顔に飛びまわるぞ可笑しき。之を小人狹隘
の量に喩ふ。それ偏小の里に住むもの。僅かに青表紙の一卷だ

にみれば。ハヤ自負尊大に構へて學者を氣取り。田父野婆に誇りて傍若無人の振舞をなす。これ皆蝙蝠と伍を同じくするの耻を知らざるものと云ふべし。

和泉式部の歌に。

人もなく鳥もなからん島にては

この蝙蝠も君を尋ねむ

二三 忠臣は二君に仕へず

これは齋の王燭と人ふ人の言で史記に出てれる名高い美談であります。齋の國の王様が奢りに長じて色や酒に耽り至要の政治を怠りてれらるゝを慨いて。忠義一途の王燭は度々御諫め申上

られたれど。馬の耳に風同様。さらに御用ゐが御座りませんでした。そこで王燭は自分の諫言が用ゐられぬものですから。せうことなしに役目を辭して壽邑と云ふ處へ隠居せられたが。暫くすると隣國の燕王は樂毅を大將として齋の國を攻めかけました。何を云ふても齋王は政治を打遣りにして色や酒にふけてれると云ふ様な有様ですから。従て軍の用意も怠り勝ちで士氣も更に振ひませぬから。忽に敗軍して亡んでしまいました。其時燕の將軍樂毅は王燭の賢徳ある人ぢやと云ふことは豫て評判に聞てれますから。ドーカ燕の國へ引き入れ燕王の臣下にしたいと思ふて。使者を差向け禮を厚ふして燕王の臣下になり

てくれよと勧めました。其時王燭は樂毅の使者に向ふて、「忠臣は二君に仕へず貞女は二夫をならべず」と云ふて。忽ち庭先の松け枝に繩をかけ自ら縊りて死んだと云ふ美談であります。夫を蓮如上人は御文に引て、わすか娑婆一世の主従でさる。忠臣は二君に仕へすと云ふて死んで心の潔白をあらはした人さるあるでなぬか。況んや未來永劫の親様に二心のあるう筈はあるまいがやと御化導なされてある。

二四 顔に似ぬ心

顔容は猿若くは馬に似たりとも。其心は玉よりも美はしき人あり。又面姿は花の如く玉の如くにて。其心は獸よりも醜きものあり。實に顔と心との似もやらぬもの多ければ、顔の美醜を以て其心の善悪を評すべからず。顔の美醜は問はず。只心の美はしからんこそイト尊ふけれ。

擇友

孟郊

獸中有二人性。形異ニシテ遭ニル人ニ隔テ。
人中^〇有^〇二^〇獸^〇心^〇。幾^〇人^〇能^〇真^〇識^〇。
古^〇人^〇形^〇似^〇獸^〇。皆^〇有^〇二^〇大^〇聖^〇德^〇。
今^〇人^〇表^〇似^〇人^〇。獸^〇心^〇安^〇可^〇測^〇。

二五 塵積りて山と成る

塵埃は至りて細かきものなれども。若し之を一所に積み重ねる

時は高き山ともなりぬべし。彼の富士の山を見よ。如何にしてかゝるものゝ出来しかと怪まるゝ程なれども。能く之を考ふれば。畢竟小さき土石の集りたるにすぎず。人間萬事皆其道理なれば。長き月日と多くの勞力だに費しなば。如何様のものにても成らざることなし。さればよろしく此諺を以て。朝に作し夕に輟めて。輕々しく進退するものゝ戒めとすべし。

塵積テ成ス山ヲ 喻下積ニ小善ヲ而成中スニ高德上ヲ (張銑)

積ニ微塵一ヲ成レ山ヲ (大智度論)

水積テ成レハ川ト則チ蚊龍生ヌ焉土積テ成レハ山ト則チ楨樟生ヌ焉學積成レハ聖ト則チ富貴尊顯至ル焉 (說苑)

積レテ土ヲ成レハ山風雨興リ焉積レテ水成レハ淵蛟龍生ヌ焉 (荀子勸學篇)
千里ハ始ニリ足下ヨリ高山ハ起ニ微塵一リ (白氏文集)

二六 氏より育ち

氏とは姓にて門閥を區別したる稱なり。凡そ姓氏の貴きよりは育方の好きには如かざるものにて。如何に門閥の家の子なりとも。幼少より賤しきものゝ懐ろて育てらるれば。其辭氣容姿悉く醜くかるべく。又何程貧賤の家の子なりとも。貴き人の手に長じて禮儀作法を教ふるれば。自ら其高風に化せらるべきが如し。されば幼少の育方こそ大切なれ。幼時の習慣は直に其性となりて一生改まらざるものなればなり。古歌に。

氏よりも育ちなりけり人はたい

花はみよしの月は更科 (詠人不知)

二七 畠水練

畠とは陸田とて水なきの處なり。水練とは泅術とて游泳の術なり。陸上にて水練の稽古を爲す者。如何に熟練したりとも水中に入らば忽ち身を溺らすの外なし。之を机上燈下にて堂々たる議論をなすもの。之が實地に臨みては何の役にも立たぬに喩ふべし。凡そ何事に限らず實地と議論とは大に相違の出来るものなれば。苟且にも事に當り變に應ずるの道理を辨へざるべからず。今の青年の人已れに何の經驗もなく。畠水練の説を唱へ

て反りて老練家の笑草となるも多かりなん。心すべきことにこそ昔或國の大王に虎を愛せる人あり。すべての器具に虎を畫かして之を愛翫せられつゝありしが。或時眞實の虎の來れるを見て大に驚き逃げ隠れたまひけるとぞ。これ亦畠水練の例話としてみるべきものなり。

二八 泥の中の蓮

蓮は泥の中より出て、少しも其氣に染まず。亭々として淨くたちて渚々しき事いふばかりなし。古人之を目して花の君子とし。又これを洒々落落の心性に配して外物の爲めに汚點を着けざるに喩ふ。實にや彼の君子が小人の中にあるも。徹頭徹尾其

悪あくに染そまらでし。凜りんとして節操せつさうを全まふするの風情ふうせいは泥中でいぢゆうの蓮はすに殊ことならず。其名そのなの世よに傳つたへて香かばしきも亦また宜よろならずや。古今集ここんしゅうの中に。僧正そうじょう遍照へんしょうが蓮はすの露つゆを見てよめる歌うたに。
はちす葉はの濁にごりにしまぬ心こころにて
なにかは露つゆを玉たまとあざむく

これは法華經ほふけきやうぎゆうしゆつほん出品しゅつぽんの文もんに。「不染ふせん世間せけん法ぽう一如いちに蓮華れんげ在ざい水すい」
とあるを以もつて詠よめり。藹々居士あいつくこじが此歌このうたに答こたえて。

白露はくろを玉たまとあざむくあざむかぬ
はちすは見るにまかせたりけむ

コハ一機軸いちきぢくを出いで、イト、面白おもしろし

二九 鱒ますの頭あたまも信心しんじんから

鱒ますは魚うをの最もつも賤いやしきもとなれば、其一その頭あたまもとより半文錢はんもんせんの價あたいだになし。されど已たのれ一切さいの妄念まうねんを除のぞき唯ただ此心このこころひとつになりてふかく信仰しんかうすれば。必ず彼かれと我われと相感あひかんじ相合あひあつして中うちに一微塵ひぢりんを隔へたてざるに至いたるべきが故ゆへに。透とほらざるの心こころなく徹てつせざるの情じやうなかるべし。右歌こゝかに「心こころだに誠まことの道みちにかなひなばいのらすとて、も神かみやまもらん」。又また「祈いのりてもしるしなきこそしるしなれ祈いのる心こころに誠まことなければ」と云いへり。實げにや心こころだに誠まことありて。疑うたがはず欺あざむかず能よく、信心しんじんを籠こめて祈いのらんには。鱒ますの頭あたまも震わげんを現げんすべし。何なにに況いはんや神佛かみほとけに於おいて必ず利益りやくあるものぞかし。

昔一人の田舎婆あり日頃佛法を崇信しけるが。去る大智識に向ひ。御經は文句長くして婆には覺るにくし甚深の御法を一口に縮めたる文句を授け玉へ。朝夕打ち誦して佛恩を報じ奉らんと云ふ。大智識善哉々々として。金剛經の「應無所住而生其心の句を授けければ。婆は打ち喜びて立ち去りけるが。其音讀は打忘れて「大麥小麥二升五合」と唱へつ。いつとなく彼の婆は大智識よりイト難有き文句を授かりたりと云ひ傳へて。病人なごの祈禱をたのむもの多くなり。婆は憚る色もなく病人の枕邊にて一心に。例の「大麥小麥二升五合」を唱ふるに。靈驗著しく瘡病など忽ち落ちけり。或人怪みて何をか誦するらんと聞

き居たるに。例の「大麥小麥二升五合」なるに噴飯し。右の大智識に逢ひて斯く告げ如何なる文句を授け玉へると問ひて。彼の「應無所住而生其心」の音近きより聞き違るたるものなるを知り。歸りて婆に大麥小麥の誤りを諭し。更に「應無所住而生其心」の本文を間違はぬ様に口授し。婆も骨折りて聞き覺るいさゝかも誤音なき様になりければ。其後病人の祈禱などに「應無所住而生其心」と打返し。打ち誦ゆるに。此度は却りて効驗なかれしとぞ。實にや「大麥小麥二升五合」の間違が効驗ありて。「應無所住而生其心」の本文は却りて効驗なかりしことイトれもしろき寓言なり。「鱒の頭も信心から」と云ふによくあ

へり。

三〇 麻に連らるる蓬

蓬は枝さし直からぬ草にて。ひとり育つ時は多く曲り勝なるべ
けれご。直なる麻の中に交りて育つれば其真直なるに連れて自
ら美しく生立つなり。人も亦これと同じく。友の善惡によりて
善くも悪くもなるものなれば。常に善き友を得んことを勉めざ
るべからず。已に善き友を得て善きことを見聞きなば。知らず
識らずに化せられて善き人となり得らるべし。

曲蓬 何ヲ以テカ直カラン
託身 依ニ叢 麻ニ (潘安仁)

しかりとて直き心も世に立たず

(家隆家集)

世の中の麻はあどなくなりけり
まじる蓬の麻ましの世や
心のまゝの蓬のみして (新勅選集)

三一 念力岩を通す

一心一途に思ひこみたる力を念力と云ふ。この一念力は奇しき
力を有するものにて。岩石などの堅きものをもやすくと通し
貫くなり。凡そ事を初め業を企つるに。志氣を一方に注ぎて餘
念を他方に廻さず。百たび折られても撓まず。千たび挫かれて
も屈せざりせば。如何なる難事たりとも成就せざるることなし

俚 諺

されば人として志氣最も勇なくんばあるべからず。勇なければ
倦みて進むことなし。進まざれば事成らず。故に志氣だに確立
して其所爲の正しかりせば。何ぞ外誘の爲めに屈撓せられむや
史記に曰く。李廣出て獵す。草中の石を見て以て虎と爲し之
を射る。石に中り鏃を没す。之を見れば石なり。因て復た更に
之を射る。終に復石に入る能はずと。
古歌に曰く。

虎とみて石に立つ矢のあるものを

なごか思ひの通らざるべき

三三 鳥に反哺の孝あり

鳥は孝鳥にして。反哺とは食物を反す義なり。初め親鳥の雛を
養ふとき餌を其口に哺ませけるを。子鳥の能く之を忘れず。已
れ成長したる後は餌を外に求め來りて親の口に哺ませ反し。以
て養育の恩に報ふるとかや。夫れ父母養育の恩は至深至大なる
ものなれば。子たるものは常に孝道を心がけて其恩に報ひざら
べからず。鳥類すら尙然り人にして鳥に如かざるべけんや

慈鳥夜啼

白樂天

慈鳥失其母。啞々吐衰音。
晝夜不飛去。經年守故林。
夜々夜半啼。聞者爲之沾襟。

聲中如告訴未盡反哺心

百鳥豈無母爾獨哀怨深

應是母慈重使爾悲不任

昔有吳起去母歿喪不臨

哀哉若此輩其心不如禽

慈鳥復慈鳥鳥中之曾參

三三 牛は牛連れ馬は馬連れ

連れとは群れにて仲間の義なり。牛馬の群れ各其類を以てすれば。牛は必ず牛連れ。馬は亦馬連れなるものぞかし。凡そ類集り群分れ聲應じ氣求むるはこれ自然の理なり。故に人の相交

るや亦其類を以てすれば。上に交りて之に諂ふの失なく。下に

交はりて之に瀆さるゝの耻なし。斯くてこそ上下各其交りを

得たりとはするなれ。さるを今の人已れの分限を顧みず。只名

利の場に奔走して往々不測の禍に罹る。豈悲しからずや。

譽め毀る人のふるまいみる時は

牛は牛連れ馬は馬連れ (最明寺時頼)

三四 鶉の真似する鳥

鶉とは水鳥にして形は鳥に似て黒く嘴永くして其末微しく曲り善く水を潛りて魚を取ること巧なり。鳥は林禽なれば固より水に入りて魚を取るべくもあらず。然るに鳥が鶉の魚を捕ふる

状を見て。イト易きことの如く思ひて已れも亦水に潜らんとす
ればし。ハヤ水の目口に押し入りて溺るゝの外なきものなり。こ
れは小人などの巳が業の拙きをも省みで。妄りに人の真似をし
て却て禍を取るに喩ふべし。されば覺束なき似非わざをなし
て。苟且にも人の笑草となることなかれ。

風雅集に曰く。

大堰川堰材に來居る山鳥

うのまねすとも魚は取らしな (公朝)

廻國雜記に曰く。

取もるぬ魚の心も耻もせで

うのまねしたる鳥川かな (宗祇)

三五 たのむ木陰に雨漏る

路ゆく人の暴雨に遇ひて。こゝは頼もしき處なりと見立てゝ。
立ち寄る木陰の下に雨漏りて。頼む陰なく其袂の濡るゝが如く
人の窮する時。其たのみとするものゝ爲めに反りて虐げらるゝ
ものなり。誠に世によるづ佗たる身は。何から何まで難澁なる
ものなれども。それが爲めに節を變じ心を亂すは丈夫たるもの
ゝ本懐にあらずぞかし。

太平記に曰く。主上(後醍醐天皇)笠置を御没落の時。梢を拂
ふ松風を雨の降るかど聞しめして。木の陰に立よらせ給ひたれ

ば。下露のぼらくと御袖にかゝりけるを。主上御覽じられて

さしてゆく笠置の山を出しより
天が下にはかくれがもなし

藤房卿。なみだを押へて。

いかにせんたのむ蔭とて立よれば

なほ袖ぬらす松の下露

と返歌せりとぞ

三六 慾の爲めには目も見へず

慾ばかり悪きはなし。慾心一たび萌しぬれば心其慾の爲めに迷ふが故に。只其欲する所の者のみ目につきて慾の外には何事を

も一切見えず。これは目も闇み心も昧みて前後の思慮分別すべ
きの明を蔽はるればなり。凡そ慾に迷ふは凡夫の常とは云へ
些細なる慾の爲めに。赤耻をかきて可惜名を汚し。果ては世人
に爪はじさせらるゝに至るはそも何たる白痴ぞや。列子説符篇
に曰く。昔し齊人に金を欲する者あり。清且に衣冠して市に之
き。金を鬻ぐ者（昔の銀行）の所にゆく。因て其金を攫みて去
る。吏之を捕得す。問て曰く人皆在り子人の金を攫むは何ぞや
對て曰く金を取るの時人を見ずたい金をみるのみと。註に曰く
志金を攫むに在て其人を見ず。これ獸を逐て太山を見ざ
るなり云々。

三七

足ることを知れ

凡そ我分限を顧みて聊かも不足を鳴さず。其分に安んじ樂むをば足ることを知ると云ふなり。されば有るは有るに任せて足ることを知り。無きは無きに任せて足ることを知りてみれば。日用萬端の上に於て何の不足もなきことなり若し之に反して。足ることを知らずして己が貪欲を縦にするときは設ひ金銀の中に埋れて居ても。猶厭きたらで生涯苦惱の絶ゆる期なかるべし。天海僧正の歌に。

事足れば足るに任せて事足らず
 足らで事足る身こそ安すけれ

されば萬事に足ることを知りて外を求めず。自身の分際を守りて過さるは安樂の道にこそ。

遺教經に曰く。汝等比丘若し諸の苦惱を脱せんと欲せば當に知足を觀すべし。知足の法は即ち是れ富樂安穩の處なり。知足の人は地上に臥すと雖も猶安樂と爲す。不足知の人は天堂に處ると雖も亦意に稱はず。不知足の者は富むと雖も貧し。知足の人は貧と雖も而も富めり。不知足の者は常に五欲の牽く所となり。知足の者の憐憫する所と爲る云々。

三八

鷹は死すとも穂を啄まず

鷹は鳥中の強猛なるものなれども。己が食ふべき餌なき時は縱

ひ餌て死に及ばんとするも。他の鳥類の如く人の耕し種るたる五穀の穂なご啄き食むことを爲じ。況て道義を守るの士は如何に窮したればとて。權門に匍匐して不義の俸祿を受けざるものにて。其節介の堅きことを知られたり。さるを世には難義なることありて其堪る難き時に至れば。道ならぬ行を爲す者多しなごか此鳥に對して漸ぢざらんや。

假名手本忠臣藏五段目に「鷹は死すとも穂をつまず」とあり。この忠臣藏は竹田出雲の作にて當時の譬を用ゐたるなり。さて出雲が此譬を用ゐしは。勘平が一旦女色の爲めに主人の勘氣を蒙りて零落たれども。他に食祿を求めず。死に至るまで能く義

を守りたるに比し。死の字を以て六段目切腹の襦染と爲し。且つ鷹の羽は淺野内匠頭の徽章なれば。鷹の字を下して暗に淺野氏遺臣の隨一たるを示したるものにて大に味ひあり。

三九 勝て兜の緒をしめよ

勝て兜の緒をしめよとは積極的にして。油斷大敵とは消極的である。油斷とは心を許して注意を怠るの謂にして。ソハ恰も大敵の如く恐るべきものなれば。能く之を慎み之を遠け是にうち勝つを肝要とすべし。もし慎みの心を忘れて氣を許し物事に怠慢なる時は。測らざる災難を招き思はざる過失を起すことあり故に油斷をば大敵なりと心得。勝て兜の緒をしめて。すべての

事につきて篤と警戒を加ふるべからず。

油断をば大敵なりとこころゑて

堅固にまもられたのが心に (二道歌集)

寛永の頃。永井尙政と云ふ人が時の大老井伊直孝に出逢ふて云はるゝに。「拙者如き若年の者が上の御恩にて段々重き役に取り立てられ。恐れ多くれもへば。貴方の様な老功の御方に何か身の心得になることを承りて覺たし守りたし」と申されたれば。直孝の答ゑらるゝには「それはよき御考へなり。如何にも某が一ツ存じてれることがあるから御傳授申そう。されど大切な事柄ゆへ。愈々御聞になりたひとあらば。某の宅へ御越に

なれ」と云はれた。夫で尙政は日を定めて禮服をつけて井伊公の宅へ行かれたるに。直孝出で迎へて一間へ通し云はるゝには「世間に油断大敵と云ふことがあるが覺ゑて御座ろう。此一言の外某御傳授申すことなし。必ず御忘れなざるな」と申されたとある。

四〇 心の鬼が身を責める

世の中の人はしらねど科あれば。

我身を責める我心かな。

怖ろしき鬼の住家を尋れば。

邪見の人の胸にこそすめ。

かくれみのうき名をかくす方もなし
心に鬼をつくる身なれば
我が爲めに疎きけしきのつくからに
かつは心の鬼も見えけり

四一 心正ければ事正し

讀書續録に曰く。心は水の源の如し源清めば則ち流れ清み
心正ければ則ち事正しと。實に其通りである。一言にて其性
情を察することが出来るので。一例を擧て云ふてみると。夜業
の時などに未だ十時ならざるにハヤ十時なりと云ふは横着者に
して。巳に十時になるにまた少し間がありますと云ふは勤勉家

なり。又。江戸と云ふ處はひどい處だ水を買ふても錢が出ると
云ふは横着者にして。江戸はよい處だ水を買ひても錢がもうか
ると云ふは勤勉家なりと。げに味ふべきことならずや。これは
二宮尊徳翁の話である。

四二 藝は道に依りて賢し

從レテ農ニ論スレハ田ヲ夫勝チ
從レテ商ニ講スレハ賈ヲ賢ナリ (程材篇)

藝として凡て身に學び得たる業は已が主とする道々によりて各々
達したる處のあるものなれば。下賤の者なりとも其務むる藝道
に於ては反て智者と呼ばるゝ人に勝ることあり。されば耕作の

事は農夫が委しく。商賈の事は商人が上手なるべし己れ其道に入らで妄りに客隊するは淺間し。故に總じて慢心なく其道々によりて取扱ふこそ肝要なれ。

四三 劍を堅して舟を刻む

昔楚の國に愚なる人あり。舟に乗り行きけるに誤りて其帶びたる劍を水中に墜しければ。俄かに小刀を取出して其墜したる舟の傍に刻みを付けにき。これ舟の止して時。其處より水に入りて之を取らんが爲めなりとかや。此人舟の次第にゆきて劍のしたがい行かざるを知らず。誠に愚迂の至りにこそ。之を御當流の安心に例せば。かわりやすき凡心をながめて。或時はさもこ

思ひ或時は往生如何と二の足をふみ。かわらす御慈悲の目のつかぬ若存若亡の者に譬ふべし。先徳の曰く。

往生は我機に問ふな法に問へ

御報謝は我機にまかすな心を責めよ

ご。真にこれ念佛行者の三唱すへき格言にこそ。

四四 轉ばぬ先の杖

杖とはつきするの畧語にして。歩行の際地に衝きて身を扶くる者なれば。躓き倒れざるに先に豫め之を携るざるべからず。凡そ何事も平生に注意すれば轉躓の患なかるべきに。世人多くは平生に怠りて嗜みれくことを知らず。事に臨み變に逢るは。

周章狼狽の状殆んど頭髮に火の付きたるが如くなる。見苦しき限りにこそ。

彼の太田道灌は。文明十八年七月。其主君上杉定正の爲めに糟屋の第に殺されしが。死に臨み白刃の下。微笑して徐ろに口を開いて。

かゝる時さこそいのちのれしからめ

かねてなき身とれもいれかずは

と詠じぬ。彼は誠に安心立命の人なりしなり。彼は誠に平生業成の人なりしなり。轉ばぬ先の杖をつきたる好適例となすべきなり。

四五 論より證據

論とはアゲツラフと和訓す。言ひ詰るの義にて總じて物の道理を詰めて論辨する事を云ふ。證據とは證左の義にて證據とする物事を出して證明するを云へり。凡そ論辨に巧なるものは非を是に云ひなし鳥を鷲に云ひ曲ぐることもあるものなれば。斯る強辨の者と論せんよりは早く之が證據立てしてこれを事實の上を示すこそよけれ。よしや其論は卑近なるも。其口は訥辨なるも。其事實の證明さる的確なれば。必ず勝を制することを得べきなり。法苑珠林に曰く。之を空談に謬るは之を事實に證するに如かず。之を聞て髣像たるは之を耳目に決するに如かず。故

に信は學に如かず。言は行に如かずと。これ「論より證據」の
典據とも云ふべきことなり。

四六 食はず嫌ひ

食物の味はなべて咀嚼の裡にあれば。篤と口に嚼みわけ佳否を
味ふてこそ好嫌の念も起るものなれ。さるを已れ未だ夢にだに
も其物を食はず。妄りに之を忌み嫌ふは實に愚なる沙汰とやい
はまし。俗儒が佛教を排し。凡僧が孔夫子の道を斥くるなど。
皆食はず嫌ひの例なるべし。今も昔も這般の人多し淺猿しや。
雖有嘉肴一弗食。不知其旨也。
雖有至道一弗學。不知其善也。 (禮記)

四七 螳螂の斧を以て隆車に向ふ

螳螂とは俗にカマキリと云ふ。蓋し髮剪りなり。喜みて人の髮
を食ひ切ればなり。さて此虫は常に頭を擧げ臂を怒らす。其の
兩臂を擧れば斧を執るの象に似たり。之を以て隆車とて大なる
車の輻り來る轍に觸れ當りて其運轉を止めしめんとして。却て
身を喪ふことを知らず。これ短才微力なるもの、輕々しく大敵
に手向ふことの喩にして。已が分際を知らざることを云ふなり
古歌に曰く。

はづかなる斧ふり立て、山路ゆく
車に向ふ蟲ぞはかなき

四八 寒に帷子土用に布子

帷子は麻にて織りたる單衣なれば暑中の着物なり。布子は木綿なごにて製したる綿入なれば寒中の衣服なり。されば冬天の寒き時には帷子の用なく。土用の暑き節には布子は不用なるべし。さるを寒中に向ひて帷子をすゝめ。土用に及びて布子を寄するはこれ益なき徒事にして。乃ち時機に應ずる才なきの喩なり。只人の笑ひ草となるにすぎず。

何事も時ぞとれもへ夏着てと

錦にまさる麻の羽衣

四九 竹馬の友

竹馬は小兒の玩具にして。竹の先に馬の頭を造りつけ紐などを結びて手綱として之に跨りて馬に騎る體をするものなり。之を竹馬の戲と云ひ。この戲事して遊びし友達を竹馬の友と呼びて。イト中よくするものなり。されば竹馬の友は相愛して永く忘るまじきことなり。

一見竹馬の戲
毎思童騷ノ時ヲ (白樂天)

竹馬を杖とも今はたのむかな

わらは遊びを思ひ出でつ。 (西行法師)

竹馬のはやしれそしをあらそひし

友はれほかた先達ちにけり (詠人不知)

五〇 賢ければ恍惚よ

恍惚るとはとぼけるの略語にて。故らに愚鈍を態と爲と云ふ。已れ眞に賢ければ其才智を晦まして一見馬鹿の如き状態を爲すこそよけれ。これ禍を避け身を保つのにして又辛き世に處するの道なり。中世の大徳に白隠禪師と云ふあり。人あり來りて告て曰く。我が女懐胎せり而して禪師の胤なりと云ふ。一カ養育の料を得たしと。禪師曰く委細承知したとて若干の金を與ゑられたり。暫くして又來りて曰く。禪師に大に謝罪すべきことあり我女の懐胎は禪師の胤なりと云ふ。たは遁辭でありまし

たとして金若干を返せり。禪師曰くよしと更に一言の辨解もなく叱責もせられなんだと云ふことである。

序 辨

一 國民と宗教

國民は悍馬の如く宗教は轡の如く僧家は御者の如し」とは。名高いナポレオンの言であります。悍馬と云ふはまことに性の悪い暴れ馬のこと。慾を起すやら腹を立てるやら。妬み怨み怒り狂ふ我々の心的状態は。宛然廣い野原を無暗矢鏢にかけめぐりて居る暴れ馬同様であります。私は日々新聞を読む度にそう思ひますが。斬りたとか殺したとか云ふ血塗れ騒動。盗んだとか

引込んだとか云ふ泥棒話。これがイロハのいの字も知らぬ様な無教育な者ばかりかと云へば。中々そうでないので十分に教育もあり。社會から尊敬を受けてれる先生達までか。御用商人から賄賂を取りたのやら。銀行の帳面尻を誤魔化したとやら。實に社會道德の腐敗しきりた有様は。新聞テフ淨玻璃の鏡に歴然どうつるではありませんか。故に御經の中には心猿意馬と説いて。暴れ狂ふ我々の心を猿や馬に御諭ゑなされたのであります。其暴れ馬同様の我々の心に。悪は嗜まねばならぬ。善は勤めねばならぬと。自ら警め自ら制し。自分ながらに聊かなりともかみわけの出来る様になりたは。全く宗教の賜でありて。之を

宣傳する聖職が僧侶ですから。宗教を善に諭る。僧侶を御者と云ふて馬を使ふ馬丁に諭るたのであります。大經には「一心制意端身正行」と教ふる玉ひ。蓮如上人は「我が心にまかせずして心をせめよ」と仰せられて。たのめ助けふの御慈悲が聞き開かれ。かゝる機までも御助け候へと後生の大事に宿のとられた上からは。欲がたこるやら腹の立つ其中にも。意を制し心をせめると云ふて。これではすまぬくと如來聖人の御冥見に耻入りにて。心をれさへつけ心をせめつけて細々ながらも人の人たる道を踐ませてもらうのであります。そこで或信者は「難有や六字の繩にしばられて心のまよにならぬうれしさ」と喜ばれました

が。此處に至りてこそ初めて他力廻向の御信心が。現當二世に活動して下さると云ふ宗教の妙味が。自分々々に了解が出来てありませう。ドーカ諸君。何でも云ふ精神から。奮勵一番御大切に聴聞してもらいたい。其間に滾々としてつきぬ興味。諸君方の精神界に湧き出るであります。「茶屋の餅もしいらにや喰へぬ」と云ふ俚諺もあるから。私は幾重にも御勧め致しますよ。

二 至りて堅きは石なり

昔。音羽の明詮律師。若年の時南都興福寺に入り法相を學ばれたが。性質鈍くして學問が上達せぬゆへ。自ら退屈してもう故

郷へかへりて還俗せんと。戻りがけに大佛の前で時雨にあい。大佛殿に立寄りて休みながら。雨滴で敷石に穴があいてあるをみて大に感ぜられ「至りて堅きは石なり。至りて柔かなるは水なり。水能く石を穿つ心源もし徹しなば菩提の覺道何事か成せざらん」。何程覺るのわるい私でも學べは學者になれぬことはなみと。それから一心堅固に勉強して後には名高き大徳になられました。夫を蓮如上人は御一代記聞書に御引用なされて「如何に不信なりとも聽聞を心にいれて申さは御慈悲にて候間信をうべきなり」と仰せられてある。聞かせにやれかぬは釋迦の御慈悲。助けにやれかぬは彌陀の御慈悲。佛と佛の御慈悲が尊いで

聽聞心に入れてささるすりや聞き得らるゝ御ゆわれでありますから。ドーカ且くの間心を鎮めて聞てもらいたい。

三 鷺の山昔の春は遠けれぞ

「鷺の山昔の春は遠けれぞ御法の花は今にはひけり」。實に諸君や我々は值佛聞法の隨一たる南瞻浮州の其中にも。かの二億萬の印度人民などは。特に釋尊降誕の地に生れながら。現生には印度虐政の下にしかれ。未來の大事は波羅門教。または耶蘇教などに迷わされ。此世も地獄未來も惡趣。從苦入苦從冥入冥の不幸。しかるに御前方は今日佛教の祖國とも云はるゝ日本帝國に生を受け。神代ながらの皇室を頂き。天皇陛下の御仁慈は民

を憐み玉ふこと親の子を愛しむが如く。立憲自治の政に浴し
 仁風偏く吹く八洲の春。こう云ふ結構な御代に生れ。數多宗教
 の其中にも時機相應の要法たる御開山の御流れを汲み奉り。
 我往生の大善知識は。晨に夕に寢食を忘れ玉ひ御身にかへての
 御親切。ほんに耳傾けて聞くばかりで。三祇を一念に超越し。
 死なば浄土へまいりなん。生きなば念佛となへなん。何方へこ
 けても大丈夫。安心立命の大幸福。しかし蓮如上人も。口と身
 のはたらきは似せらるゝなり。心ねがよくなりがたきものなり
 肩に肩衣手には珠數。外形だけは揃ふたが。鬼の手に渡らねば
 ならぬ此魂に。彌陀のまことがきこえてるか。浸みこんでね

るか。處もよく時もよし。難値難遇の本願を。湯水を使ふ如く
 澤山にさかるゝ筈でさいたとは思ふな。逢はるゝ筈で逢ふたど
 は思ふな。半偈に身を捐て。一句に臂を断ちし人もある。聞
 きそここのうてはならぬ。もらいはづしてはならぬ。大事に聞
 ぞや。

四 傀儡師首にかけたる人形箱

「傀儡師首にかけたる人形箱佛出ぞうと鬼を出ぞうと」。源と
 華嚴經の中に。「心ハ如シ巧ナル畫師ノ畫ニ種々ノ五蘊」とある意によ
 りて一休和尚の詠せられた歌である。このころは六道苦樂の
 因果は皆我心より出るものにて。今日の苦樂は皆過去の善惡の

因よによる。彼かの手品師てしよしの人形箱にんぎょうばこから鬼おにも出だせば佛ほとけも出だす。人の心こゝろも其その通りで。日々たらく夜々よくに善心ぜんしん悪心あくしんかわるく起たりて未み來らいは輪りん廻わ生死じやうじの種たね蒔まきをするが御互おたがひの今日こんにちの身みの上うへぢや。一休きう和尚わしやう諸國しよこく行脚あんぎやうの折柄たうから、駿河國すまのくにの田舎いなかにて豪家ごうかにしばらく逗留たうりうして御座ござりたが。其家そのやの亭主ていしゆは平生へいぜい殺生せつじやうを好このみ物の命いのちを取とるを樂たのみとせしが。或時あるとき庭前にはさまの樹きに鳩はとの二羽ふたはとまりてあるを視みて。忽たちまち鐵砲てつぱうにて一羽はを打うち落たせり。一羽はの鳩はとは驚おどろきにげ去さりた。暫しばらくして先まきの一羽はの鳩はと又また來きりて元の樹きの枝えだにとまりしを又また打うちれとせり。フト心付こゝろいてみれば。此この二羽ふたはの鳩はとは定まめて雌雄しじゆうならん。何いづれが雌めす何いづれが雄おすともわからねども。死しを共ともにせん。此この枝えだにかへり來きたり

我が鐵砲てつぱうを待まちしならん。さても鳥とりでさる夫婦ふうふの約やくあればかくあるものを。況いはんや人間にんげんにして殺生せつじやう——物の命いのちを取とるを樂たのみとするとは。業果ごうくわの程ほども恐おそろしけれとて。遂つひに一休きう和尚わしやうに請こふて剃髮ていはつ得度とくどを受けられた。其時そのとき一休きう和尚わしやうとありあへず今の歌うたを詠よまれた。前まへに鳩はとを打うち落たした時は我心わしんから鬼おにを出だし。遂つひに廻心くわいしん懺悔ざんげして出家しゆがいせられしは我心わしんから佛ほとけを出だしたと云いふ歌うたのこゝろ。今いま此この御座ござへまいられたは佛ほとけになる御おんゆわれを聽聞ちやうもんの爲ためめぢやぞや。

五 閑林叩骨泣かんりんをたたくてく

「閑林叩骨泣かんりんをたたくてく靈鬼りやうき悔くわい前生ぜんじやう」と。御經おんぎやうの中に御演說おんげんせつなされてあ

る。これは或日釋迦如來御弟子の羅漢をつれて托鉢に御出なされ。其御歸り路に一ツの森がある。其森の中で怪しき泣き聲がきこえるで。立寄りて御覽なされたら。一人の餓鬼が鬻體たゝいてさめぐと泣てれる。何故に泣くやと御尋ねなされたら。餓鬼の申しまするには。私は前生人界へ生れながら。佛とも知らず法ともしらす慳貪邪見で日を送りましたが。其報ひによりて命終るや否餓鬼迫へれちまして。饑饉饑渴の苦みを受けてれることでありすが。其苦めに付けまして只憎くゝてゝなりませぬは。前生の身體で御座ります。聞けば聞こゆる耳は持ちながら。参り下向の出来る手足はありながら。なせ未來永劫の

宿をとりてくれなんだと思へば。たゞ前生の身體が憎くゝてゝなりませぬから。鬻體たゝいて恨みをのべてれるので御座りますと申上た。其時如來様の御化導に。汝は愚か者ぢやぞや。鬻體たゝいて泣いたとて本へ戻ろう道理はなむで。鬻體たゝいてこぼす涙があるならば。心たゝいて懺悔をせよと仰せられたと云ふことが此經文のこゝろである。今同行方も五慾の我家をあどにながめ。折角此御座へ出て下された所詮には。心たゝいての懺悔。日頃のあやまれる心中を改悔懺悔とあやまりはてゝ。本願一實の大道へたい出してもられうぞや。

六 吹く風と水の流れとなかりせば

「吹く風と水の流れとなかりせば如何で深山の花をながめん」。
月に叢雲花に風。風ほど惜きものはなけれども。其風が吹きち
らしたればこそ。鳥も通はぬ深山幽谷に爛熳とさきみだれたる
櫻花を。見るべき縁も手がかりもなければ。谷川の流るゝ水
にパラ／＼と波にあやなす其花の散りしまゝを。此里へ流れ
／＼して人目にかゝり。龍田の紅葉大井川花の筏と下りゆく。さ
てこそ奥山にも見事な花の咲きつらんと。あまたの人にも賞玩
さるゝは風と水とのありしゆへ。十萬億の西の空。嵐車も蒸氣
も及ばぬこと。十切久遠の古へに。正覺果満の花盛り。機法一

體の名號六字。三千年の伽耶の春。久遠實成阿彌陀佛。五濁の
凡愚のあはれみて。初めて娑婆界へ流れ出たる六字の花。色香
もうせず二字四字の一心歸命の御はたらき。愚禿すゝむる處さ
らに私なし。番々出世の善知識。蓮如上人の文の如く信心決定
あるべきこと肝要なりと。支證の爲めに御判をなされた。此御
相傳の吹く風と。大谷の清き流れとなかりせば。深山かくれの
大乘無上の御法りは聞ける時節はなるのであるぞや。

七 耕牛無宿食

「耕牛無宿食。倉鼠有餘糧」。牛と云ふものは大に農家の爲め
になるもので。春は耕し秋はれさむ。牛程農家の爲めになるも

のはなる。それ程世話やいて米つくるから、飯米は米かと云へば耕す牛に宿食なく。トント薬や草やすりぬかばかり喰ふて我がつくりながら米食ふことならぬ。又倉鼠有餘糧と云ふて。鼠と云ふ奴は人の邪魔になる奴で。これほど田を植たやらどれ程米をとるやら知らねども。衣服くつたり俵をかちりたり。悪いことばかりして草も食はずすりぬかも食はず。倉の鼠は餘れる糧あり。なんでも農民や牛が汗水ながして作り上た米ばかりを食ふてれる。御座の同行方は仕合せなもので。米食ふ鼠みた様なものぢや。高野山には九萬九千。叡山には三千坊。澤山な僧分方は牛みた様なものぢや。自力の田地を耕して、四弘誓願

の植付やら。六度萬行の種蒔やら。菩提涅槃の泥まぶれになりて。自力の取り入れに汗水流してれらるれど。其飯米はとたづねたら。釋迦の教法ましませど。修すべき有情のなきゆへに。さとりうるもの末法に。一人もあらじとき玉ふ。牛の飯米は薬や草。三衣まどうて修行しながら證られぬが末法ぢやに。御座の同行は米食ふ鼠。四弘誓願が何ぢややら。六度萬行が何ぢややら。袈裟もかけねば衣も着ず。自力聖道の菩提心こゝろもことばもれよばれず。菩提涅槃のとり入れは少しも知りたことばなければども。若不生者のちかいゆへ。信樂まことにときいたり。四弘誓願も六度萬行も。名號六字に成就して農家に害をす

る鼠が米食ふ様に。三世十方の諸佛の邪魔した悪人が。昨日の御座でも御勸化の白米。今日の御座でも他力廻向の米の飯。功德成就と腹ふくれ。浄土真宗の米倉の中に。正定聚不退と御育てを蒙るのであります。

八 火の中をわけても法をさくべきに

「火の中をわけても法をさくべきに。雨風雪はものゝかずかは。」
總じて教を受け道を聞くは容易ならぬことで。無量壽經には「設満大千火必過要聞法」とあり。又「若人無善本不得聞此經と御説きなされて。一句聞法の結縁も皆是宿世善根の致す處と申すものぢや。見受ける處が各々方は至極結構なことにて。六十

七十までの長命をして。世の中の事に不足もなく。別して佛法繁昌の世に生れあはせ。わけて浄土真宗の法門に逢ひ奉りて安心を決定し。極樂往生の身と定りたは此上もなき仕合なごぢや。昔支那の魏の國に神光と云ふ出家がありて。兼て佛道修行に心をよせ。日夜怠らず學問をなされたが。何卒明師に遇つて教へを受けたいと思召す折柄。天竺より達磨大師が渡らせられた。そこで彼の神光法師は渡りに船を得たる如く。闇夜に炬火を得たる意地して深く喜び。遙々と尋ねゆきて達磨大師の御艸庵へ推參致された。既に其日も夜に入りて九時頃。柴の戸をホトくと御叩きなされたれども。達磨大師は座禪の床に

観念の心を澄まし默然として返事をなさらぬ故に。其夜は艸庵
 の軒下に坐をしまして通宵佛道の修行御工夫をなされた。折しも
 寒の頃にて夜半より雪降り積りて白妙の東西わかたぬ夜の景色
 寒風は凜々と肌に徹り。ふりつむ雪は膝をうづむ。一點の燈火
 だにもあらばこそ。嘸寒むかりたであらう。既に夜もしらく
 と曙の頃。彼の達摩大師が草庵の内より咳はらひともろとも
 に柴の戸を推し開き。其様子をつくく御覽なされて仰せらる
 には。「其方は何の用事ありて此大雪の中にたゝずんでれるゝ
 ぞ」と御尋ねなさるゝと。彼の神光法師は爰ぞ得たりと顔をあ
 げ。「さては別義でも御座らぬが。貴僧には頃日天竺より遙々此

支那國へ渡らせられたと承る。何卒至極の法門あらば承ら
 んご昨夜御草庵まで推參致しました。モハヤ夜も深更に及びし
 ことゆへ。此軒下に夜を明かしました。アワレ不憫と思召し。
 釋尊より御相傳の法門を御傳へ下され」と涙と共に御願ひなさ
 れた。ナント奇特なことでは御座らぬか。其時達磨大師の御返
 答に。「諸佛無上の妙道は曠劫に勤修して行じ難きを能く行じ忍
 び難きを能く忍べども未だ尙其道に至ること能はず。汝其輕卒
 なる心にて我法を受けんとすること必ず不可なり。汝若實に我
 法を求めんとする偽のなき證據あらば出すべし。其上ならでは
 我法を授くること能はず」と仰せられた。其時神光は兼て用意

を致されしにや。懐口より短刀を取り出し右の手を臂元よりす
 ツぱりと切りたし。左の手にて其切り落せし手を取りて達磨
 大師の前に置いて。これを偽りのなき證據として法門を御聞か
 せ下され」と御願ひなされた。其時達磨大師も御感心あらせら
 れて。即座に釋尊より傳はりし口受心傳の直指人心見性成佛の
 法を御相傳なされて。遂に禪宗の第二祖に御成りなされた。こ
 縮門崇行録と云ふ書物の中に記してある。昔は法を聞くのはこ
 れほど難行苦行をなされたものぢや。ケ様に辛苦して御傳へな
 された御法を。澤山そうに疊の上でやすく、聽聞の出来るのは
 皆是れ三國七高僧の御相承の御厚恩と喜ばねばならぬ。

九 織者進耕者退

「織者進耕者退其成ハ功一也」。これは呂氏春秋と云ふ
 書物にある語にて。女中衆が機を織る時は次第々々に向ふへ進
 んでゆく。又農夫が田地を耕す時は段々と後へ退く。前へ進む
 と後へさがると進むと退くの違ひはあれども。一匹の絹を織り
 れわり一反の田地を耕した處でみれば其仕事の出来上りた功は
 彼此も同じことぢや。聖道自力の修行は己身の佛性を磨き顯は
 す事故に。父母所生身即證大覺位とか。初發心時便成正覺とか
 直指人心見性成佛とか談ず。又今宗の御安心は夫れとは違ふ
 て。我身は罪惡生死の凡夫なりと謙り。ひたすら佛の本願強

縁にすがりて往生を遂ぐるのである。故に元祖聖人より遠江國蓮華寺の禪勝房へつかはされし御文にも「聖道門の意は智慧を窮めて生死を出で浄土門の意は愚痴にかへりて極樂に生ず」と御意あらせられた。聖道門は進んで智慧を磨き。浄土門は退て愚痴にかへる。進むと退くとの別はあれども。阿毗跋致不退轉地に至りてみれば別にかわりたことはないのである。

一〇 林鳥一夕の宿り

「夫婦兄弟親子眷屬の一家の内に集合するは林に宿れる鳥の如く渡し船に乗り合ふ人の如く。市に集る人の如し事了れば皆散じて四方に行く」と無住禪師の砂石集の中に示されてある。實

に其通りで過日大坂梅田の停車場より瀛車に乗り京都七條に玉るまで。車室の中には所々方々の人が集りて四方山の話をしてれれども。さて七條の停車場へついて瀛車を出れば。東西南北皆夫々へ離散して銘々の宿元へ歸る。今日在座の面々も其如く此娑婆世界に居る間は親子兄弟ちや妻や夫と親しく暮せども。両の眼閉ち一ツの息絶ぬれば面々の業にひかれて六道の中何れか離散すれば。再びめぐりあふことは何れの時か期し難し。之を大經には「道路不同會見無期」と説かせられた。然るに同一念佛の人々は。親子兄弟夫婦もろとも皆一蓮託生の御利益にて未來は皆花の臺で待ちつ待たれつ。ホンニ頼もしい身の上ぢ

や。元祖聖人の御歌に。

先きだゝばねくるゝ人を待やせん

花の臺のなかばのこして

露の身はこゝかしこにてきねぬとも

心は同じ花の臺ぞ

とある。急がねばならぬは後生でありますぞや。

一一 湯浴見へテ蚤虱相と訪

「湯浴見へテ蚤虱相と訪。太厦成リテ燕雀相と賀ス」虱が着物に多く生じてこれはどうもならぬ。着物を煮へ湯へつけて洗濯しよう。釜に湯を煮やしかりと。虱や蚤が集りて。ア、御互にもう暫

この命ぢや。頓て煮へ湯の中へつけらるゝと悔み合ふてれると云ふことぢや。同行方。さこへたか分りたか。イヤサア蚤や虱のことではない。我人が罪の洗濯せうと地獄には湯玉をにやかし。獄卒羅刹が今かくと待てるが。夫をそれとも思はず唯うかゝと此世の事はかりにかゝり果てゝ暮すと云ふは蚤や虱よりも劣りたことぢやぞや。又大厦成リテ燕雀相賀とは。大きな家が立つと燕や雀が我が巢をかける住居所が出来たと云ふて共に喜ぶと云ふことぢや。同行方。阿彌陀如來は極樂を我人が未來の家ぢやと御調へ下され。乗る蓮臺も着る妙服もたべる百味の御馳走も皆とゝのへて。今やゝと御待ち下さるもの。これ

が喜ばずに居られふか。どうぞにわたつ釜の地獄へは落ちぬよ
う。尊き證りの極樂へ往生とげる身となれよと。常住不滅の極
樂を願ひ。流轉三界の生死を離れよと御勸め下さるゝのである

一二年百歳と云へども猶刹那の如し

「年百歳と雖ども猶刹那のごとし。西垂の殘照。擊石の星火。
驟際○の迅駒。風裡の微燈。草頭の懸露。臨崖の朽樹。燦目の電
光に似たり」と宗鏡錄の中に仰せられてありて。誠に人間
の壽命程あわれ墓なきものはない。然るに世の人かゝる
露の命を持ちながら急いで未來靈魂の行く先の用意をせぬと
は何故でありませう。火の用心や盗人の用心をすることは誰し

も能く知りてれる。夜寐床に入りてから風呂場の下に火は残り
てれりはせぬかどうだと思ひ出したら氣にかゝりて寐られまい
必ずれきて検査にゆくであろう。又倉庫の戸に錠をれるること
を忘れて居たら。なにほご冬の寒中でも夜の夜中に鍵をかけに
ゆくであろう。ケ様に火事や泥棒の用心はなか／＼よく行届い
て用意周到とも云ふべきであるのに。一番可愛ひ我が靈魂の未
來永劫にかゝわる一大事件を。我不關焉とすましまりて平氣の
平左衛門でれるとは何たる顛倒の甚しきことでありませうか
各々方よく／＼思ふてみられませ。風呂場の下に火が残りて居
たとして必ず火事が起るときまよりはせぬ。倉庫の鍵を忘れたとて

其晩に必ず泥棒がはいると限りはせぬ。却りて用心深くする家に火事や盗難が多くて、用心が疎漏な家であるに一向災難がないと云ふ反對な結果を見ることさねある。又家によると先祖代々昔よりまだ一度もそう云ふことにあわぬと云ふ家もある。されば火災や盗難は用心するごせぬにかゝわらず。逢ふこともあり逢はぬこともある。然るに其用心をせずとも逢はぬことのある盗難や火災でさへ。八釜敷云ふて用心を嚴重にしながら。どうせ一度は邪が非でも逢ふにきまりた臨終斷末魔。死にゆく未來の用心を投げやりにしてれる人々は。何とことろにて御座るのか。又火災や盗難ならは一度かゝりても再び取かへしの出

來ることはあれど。未來の一大事はかりは萬劫たつても取かへしはなりませぬぞや。御用心々々々。御互に無事壯健な其間に急いで彌陀の淨土へまいる用意を致しませうぞや。

一三 慈母掌中絲

「慈母掌中、絲遊子身上、衣」車をまわして糸を引き經を紡ぎ横を捻り一反一匹と織り下し。ゆきを合はせたけをくらべ染たり織たり裁たり縫ふたり。幾千萬の親の苦勞は誰が爲めぞ。何にもしらぬ頭是なき子に着せん爲めの親の慈悲ぢや。袖通して着るは苦勞もてまもいらぬごも。着るまでは親の機づくし。心づくし并み大體なことぢやない。夫を自身に織りたて、着よとあ

るなら子供の力に叶はぬ。自力で功德善根の糸を引き。願行の経緯そろへて生死出離の晴衣裳を仕立てあげて着よとあるなら。無量永劫及はぬことぢやに。それを親様は見込ませられ。成佛得道の爲めにとては。少善根の糸一筋用意せよとはれとせられぬ。永々しき兆載永劫の其間。五念門の御修行に諸善萬行の糸筋引ため。大願大行の経緯定めて惡人凡夫の爲めぢやものをと。幾千萬の御機をつくし往生極樂の晴衣裳を南無阿彌陀佛と仕立てあげ。頂く私は何の苦勞もあらばこそ。一念歸命の袖通だけでもエ、せぬ私に。至心信樂欲生我國。あなたの方から袖通しさせて下さる御慈悲の手はづか第十八願の一部始

終であります。

一四 鑿鼓圀の門を開く

「鑿鼓圀の門を開く誰か遲疑せざらんや」と云ふ古人の語がある。鑿鼓とは鑿や太鼓の事。圀と云ふは監獄の事ぢや。日本には大赦令が行はれると。役人が監獄へ来て囚人を喚び出し申し渡しをして赦すけれども。支那にては左様でなくて。天下に大赦令の行はるゝ時は。監獄の入口で役人が鑿と太鼓を台せて打つ。これが皆赦さるゝ案内ぢや。其時監獄の戸は明放しになる。こゝを鑿鼓圀の門を開くと云ふたもの。誰か遲疑せざらんやとは。天下に大赦行はれて。案内の鑿や太鼓を打ちたて

門を開いて待てるのに。私は出られようか出られまいかと見合せてれるものはあるまいと云ふ意である。今煩惱具足の我々も。生々世々の業報によりて。出ることならぬ三界の牢獄。死なば決定無間の釜入り。焦熱地獄の火あぶりにあわねばならぬ大罪人を。助くるぞよの彌陀の御喚び聲聞き得た下に。ア、難有やうれしや。斯る泥凡夫を助けて下さることはどうした不思議の願力ぞと。無疑無慮乗彼願力定得往生。我を忘れて御慈悲にすぎり奉るより外はあるまいがや。然るにかゝる御法にあいながら。我か機の方に目がついて。愆がれれば此機ではと案じ。腹が立てば此根性ではとあやぶみ。兎角仰せに順は

ず。逡巡してまだ領解の出来ぬ人は。鑿鼓の聲をきながら。私は出られようか出られまいかと心配してれると同じこと。こんなつまらぬことはない。

一五

甲冑擁體利劍携手

「甲冑擁體利劍携手ニ逢テ敵ニ遁逃ス豈ニ不レ可レ耻也」。身には甲冑をつけ手には正宗の名劍を持ち。威風堂々。軍に出で敵に出逢ふてにげてしもうては。ナント耻しいことではなるか。にげる程なら軍に出ぬがよ。同行衆。帽子肩衣手に珠數持て御法座へ出ながら。サア臨終になりてから地獄へゆくならば實につまらぬことではなるか。にげる程なら甲冑も入用でなる。地

獄へれちる程なら帽子肩衣もいらぬことだ。甲冑で出てからには戦をせねばならぬ。帽子肩衣で御法座へ出たからには極樂まいりをせねばならぬ。命がれしいて軍ににげるもまだマア最もちやが。此度の極樂往生は夫とは違ふて。どうでも死にゆく命ゆへ。御待設けの極樂へ間違ひなく往生とげる領解にもとづかれよ。

一六 宿一樹下 汲一河流

「宿一樹下 汲一河 流一皆是 先世ノ結縁ナリ」と。説法明眼論の中に示されましたが。此度は不思議な因縁によりまして。又候各々方と御法の御物語を致す次第であるが。凡そ世の中のこ

と申すものは何事によらず事々物々因縁を待て初めて顯はるゝものであります。併し折角の因縁がありて親となり子となり兄弟夫婦となりても。其因縁が和合しなる時には何の所詮も御座りません。實に所詮のなるのみではありません。大なる不幸を醸すことになるかも。夫故に因縁のあらはれたる以上は。御互に和合致して共々に幸福を得たいものであります。其因と云ふは種のことです。いくら土蔵の中に大豆や小豆の種が俵に入りてありまして。寒暑風雨の縁にふれない時には何年たつても芽も出ず花も咲きません。今御座の我々も其通りで。往生の正因たる信心の種を無明煩惱の心田に蒔き付けて頂くには。時の

縁と處の縁と同行の縁と善知識の縁と。一つの因に四の縁が揃はねばゆきませぬ。

一七 五百の獼猴月を捕ふ

僧祇律第八に曰く。五百の獼猴あり井中の月影を見て諸伴に語りて曰く。月今死し落ちて井中にあり。當に共に之を出すべし我樹枝を捉らん汝我が尾を捉れ展轉相連りて乃ち之を出すべしと。時に諸の獼猴即ち主の語の如く連なる。獼猴は重く枝折れて一切の獼猴井中に墮せりと。今御互の身の上の有様は丁度此獼猴の通りぢや。何せかと云へば。顛倒虚妄の名利。富貴の月影を眺めて。眞實快樂安穢の思ひをなし。之を捕へたいばつ

かりに。毎日忙しそくに働いて。濟むは濟まぬと不平たらぐ。一を得ては十を望み十を得ては百を望み。三毒五欲の煩惱の重荷に重荷をつみ累ねてれる其眞最中。肝心要めの露の命の細き枝が。重荷にたねずしてアツツリと切れた其時は。これほど驚く違もなく。無間地獄の井戸の中へ頭下足上とねちこむのである。ナントあわれ千萬なことぢやなるか。これぢやによりて。厭ふべきは人間界。まいるべきは安養の浄土ぢやぞや。

一八 アツターペリーの格言

「宗教を信ぜざるものは常に動搖不穩の生活をなす」とは。有名なアツターペリーと云ふ人の言であるが。實にこのことばの

通り御互に萬物の靈長たる我人の身の上に於て。宗教の必要と云ふことは今更改めて御話致さいでも世界の輿論となりてれりますが。其宗教を撰ぶと云ふことは誠に大切なことで。先づ第一に末代今時の我々が造作なく轉迷開悟の出来る御法は孰れの教であるか。又此世ながらへの間。殖産興業すべての世渡りに爲めになるが障りになるかと云ふことも考へねばなりません。又日本と云ふ國の爲め。天皇陛下の御心にならひ。五千萬の人民が一致結合するには如何なる宗教が便利であるか。祖先に對してはごう云ふものか。妻子に取りては如何であるかと云ふことを。よくよく吟味して信するが肝要であります。

一九 網裡無魚無酒錢

「網裡無魚無酒錢。酒家門外口流涎。幾回欲下脱。簑衣。當上。又恐明朝是雨天。」これは漁夫の詩である。此意は酒好きの人が魚釣に行て。終日岩の上に釣垂れて居たなれど、折節空は曇るし風は吹く。トント一尾も魚が釣れぬ。乃ではつと退屈して。あくひたらしくヒョット後ろの方をふりかへりてみれば家がありて而も其家が酒家とみわて門に酒の看板が出てある。素より酒好きなきな男であれば。酒の看板をみるとサア酒がのみ度うてくならねども。網裡魚なく酒錢なしで。魚一尾も釣れぬものぢやで魚賣て一杯呑もうと云ふことが叶はぬ。そこで酒は呑みだし酒

代はもたず。酒家門外口涎を流す。たらく涎流して酒屋の
 門口を行たり戻りたり。幾回か蓑衣を脱して當てんと欲す。
 ア、是程呑みたい酒。一層の事に此蓑賣りて酒呑ふかと。何遍
 も思ひ付ては見たれどもイヤく又恐る明朝是れ雨天ならん
 ことを。今日の氣色では明日は大方雨天だろうが。今日蓑賣り
 酒呑んでも明日雨天になりた時。蓑がなくては不自由なるま
 い。マアく呑み度くはあるがこらへませうと。明日の事を思
 ふて呑みたい酒をこらへたと云ふ詩の意ぢや。なるほど明日の
 雨天を思ふたら。蓑賣りて酒呑む様な不都合なことはやめねば
 ならぬ。未來の責苦を思ふたら。ドンナせわしい手間日間かい

てなりとも。聞かにならぬは御法義の一筋でありますぞや。

二〇 諸佛法有因有緣

「諸佛法有因有緣因緣具足得成辨」と論文の中にある
 此度は御互に御法聽聞の因緣が熟して。日々賑はしく參詣恭敬
 の足手をはこび。見佛聞法の勝緣にあい奉りても。此因緣が
 和合せぬ時は何の所詮もありませぬから。能くく聽聞が肝要
 であります。大切に聽聞が肝要ぢやと。いくら拙僧が御勸め致
 しても。各々方は聽聞の必要と云ふことがしれませねば驚きの
 念の起るう筈はありませぬ。總て世の中には流行物と必要物の
 二があります。例せば茶縞が流行とか。藍縞が流行とか。

着物の縞模様を云ふ如きは流行物である。又夏の單物冬の綿入は必要物である。人が單衣を着るから私も單衣と云ふ様に人眞似するのでありますまい。人が着ようが着まいが。人の手前を見るのではなく眞似するのでもなる。夏は暑いから單衣。冬は寒いから綿入。どうでもこうでもなければならぬのである。是と同じく此節は天理教がはやるとか。蓮門教が流行するとか。世には流行神とかはやり佛とか云ふものがあります。ソナ流行物は一時は非常に繁昌になりました。ねいゝ衰へてあとで目がさめてみると馬鹿々々しいことが澤山あるものであります。今御互に聽聞する處の他力信心は左様なものではありませ

ぬ。金剛堅固とれせられて。持てば持つほど光輝を増し。其身一人の仕合のみではありません。家内眷屬に至るまで其徳が及びまして。和合の花が咲くやら。幸福の實がのるやら。稻がよく出来れば藁までよくとれると云ふ有様で。終には天下國家に至るまで信心の徳が及ぶ様になりてまいります。ケ様な譯でありますからして。夏の單衣冬の綿入と同じく。南無阿彌陀佛は現當二世にわたりて最も必要な物でありますから。眠を覺まして大切に聽聞せねばならぬことぢや。

二一 宗教は人心奥秘の要求なり

「宗教は人心奥秘の要求なり」とは西哲の言である。人から勸

めらるゝ迄もなる。自分の方から進んで求めねばならぬが宗教である。處が広い世界を見渡しますと兎角御法義を聴聞し、御寺まいりをするは淨土眞宗に御流れを汲んだ役目の様に心得る方が多くあります。そんなにぶい考へではなか／＼生死出離の埒はあきません。御寺まいりとか御法聴聞とかは何も眞宗門徒であるからではありますまい。生れ難い人界に生を受け。萬物の靈長となりた所詮には。形而下の御世話と形而上の御世話にあづからいではすまぬのであります。形而下とは此身の上にあらはるゝ處の世話で。即ち政事法律の事でありませう。形而上とは姿た形ちにあらはれざる精神界。即ち心の内の世話であります。

す。此心の世話と云ふことはどうしても宗教の力でなければ出來なる事で……………

二二 江水三千里家書十五行

「江水三千里家書十五行行々無別語唯道早歸郷」。此詩の意は。故郷を離れて遠方の旅に暮して居たら。親の方より長々とした手紙が来た。初めから終りまで何が書いてあるかと云へば。旅はういものつらいもの。早く故郷へ戻りて來い。逢ひたひ程にとそれ計りが。肝要の用事ぢやと云ふ詩の意である。今大聖釋迦如來此界へ御出現なされ。御説きなされた一代佛教。七千餘巻と澤山あれど。ついまる處は迷ひの旅で難義してれる衆生を

ば。佛果の故郷へつれかへり。快樂安穩の境界にしてやりたひ
くの御教化ぢや。

二三

世の中の娘が嫁と花咲いて

「世の中の娘が嫁と花咲いて嬉しぼんで婆と散りゆく」オギ
ヤアくと生れた娘。にじり出した。這ひ出した。立ちだした
歩み出した。花のつぼみの愛嬌持った。鬼も十八番茶もでばな
十七八のつぼみの娘。花をさかせて花嫁と嫁入をした。子が出
来た。世帯の世話に子の世話。紅や白粉つける間はなる。姉を
乳をはなせば弟が出来た。弟が歩み出せば妹が出来た。どう
ぞこうぞ子供が一人で帯を後ろへ廻す様になると思へば。齒が

ぬけ出した。目がかすみ出した。敵がより出した。そうこうす
る内に病氣にかゝりた。命が終りた。グンニヤリした。葬式し
た。白骨になりた。世の中の娘が嫁と花咲いて。嬉しぼんで
婆と散りゆく。かゝるはかなき浮世ゆへ。常住不滅といつもか
わらぬ極樂へ往生とげる身の上とならるゝが。御法席へ出た同
行方の所詮に相さわまる。

二四

芭蕉翁の辭世

健全なる平民文學を天下に鼓吹したる芭蕉翁が。元祿七年の十
月に奈良の都を行脚し終りて。難波の津即ち大坂まで来りまし
たが。俄かに病起り御堂前なる花屋仁左衛門の邸に養生してね

られました。門弟の人々は醫療に怠りなく看病に精一杯を盡されましたれど。更に其甲斐も見ぬものですから。辭世を請はれましたら。翁は左の如く答へられたそうです。

昨日の發句は今日の辭世。今日の發句は明日の辭世。我が生涯に云ひすてし句は。一句として辭世ならざるはなし。もし我辭世如何に問ふ人あらば。此年頃云ひすてし句。いづれなりとも申したまわれかし。

亦以て翁の如何に意を俳句に用ゆることの深かかりしかを見る。ことが出来るではありませんが。私共が各方に對する説教も其通りで。ドウカ安心立命の域に達してもらいたい。ドウカ佛

陀の光明の下に正義公道を踏んでもらいたいと思ふ一片の赤心より。或は法門を談じ或は安心をとき。東洋の教訓。西土の因縁。説く處は種々無量でありますれど。彼の「昨日の發句は今日の辭世」と云はれた如く。一座々々の説教が。如來聖人の德音を傳ふべき天職を帯てれる我々布教使の辭世即ち最後の説教と云ふてもよいのであります。夫でありますから。聽聞せらるゝ皆様方にねきましても。此御座限りご心がけて。大切に聽聞せられたいことである。

二五 外典の訓言

「之を如何んく」と云はざるものは之を如何ともする能はず。

これは外典の中の詞であるが。人生百般の事がこれを如何にすべきと云ふ精神がなかりたなら。何事も成功することは御座りませぬ。況んや後生の一大事に至りては猶更の事で。地獄へ落ちて苦を受けんことをば何ともれもはず。極樂へまいりて無上の樂を受けんことをも何ともれもはずと云ふ様な。無精神なものは。千座萬座の御教化をきかされても更に其効力は御座りませぬ。吉助の處へ友達が四五人づれで来て。「ドウヂヤ吉公。今夜は一杯れごらんかい。」オ、皆よう来てくれた。貴公のゆう通りにしてたごればよいけれども。無い物が一つあるかられごられぬ。「何ぢやなるものとは魚か」「イヤ魚もある」。「そんなら

醤油か。「イヤそれもある」。「薪木か」。「それもある」。「そんなら酒買ふ錢がなぬのか」。「それもある」。「ハテ己等の考へでは何も角も揃ふてある様に思ふが。何が無ふて奢れぬぞ」。「サア貴様等に吞ます氣がなぬ」と云ふたげな。何がありても蚊があたりても。人に吞まそうと云ふ氣がなくて一杯奢られぬ。各々方も後生大事の氣がなぬゆへ。「年々をふと云へども同篇たるべき様にみわたたり」。「さりとては殘念の至りぢや御座いませんが各々方聞いた風。知りた顔の我慢勝他の思ひを廻心し。愚にかへりて聽聞せうぞや。」

二六

無常迅速生死事大

「日用應縁ノ時常ニ以テ無常迅速生死事大ノ字ヲ貼ニ在セヨ鼻孔尖頭ノ上ニ」とは。唐の大惠禪師の法語である。此の詞の意は何時しらの無常の使。今をも知れぬ身の終り。暫くも死ぬることを忘れなよ。無常迅速生死事大としツかりと鼻の尖に貼りてれけ。そうしたら日用の業をするにも。世事を營む其中から。無常の事が氣にかゝり。後生の大事をわすれはすまいと云ふ御念頃なる御教へちや。併し鼻孔尖頭の上に貼在せよと仰せられても。鼻のさきに張紙しては人中へも出られまいが。これはついまる處。後生の心懸けを肝要にせよと御示しなされたものちや。此心懸

けが肝要ちやゆへ「蓮如上人は「たれの人もはやく後生の一大事をこゝろにかけて」と手に汗にぎりて御催促を下されたのでありますから。暫くの御教化もドーカ大切にきいてもらいたい

二七

世の中に用心をせよ油断すな

「世の中に用心をせよ油断すな火事や盗人さては後の世」。火の元不用心より火事がゆく。錠前を油断するより盗人がはいる。佛法を大切に聴聞せぬから地獄へ落る。焼けて仕舞ふてから悔んでも後へもごらぬ。盗人に取られてから残念がりても役には立たぬ。地獄へちて仕舞てから悲んでも所詮はなる。焼けぬ先から火の用心。取られぬ先から盗人の用心。地獄へちちぬ先

から後生の用心。

二八 養壽之士先病服藥

「養○壽○之○士○先○病○服○藥○治○世○之○君○先○亂○任○賢○」
は潜夫論の中にある御言で。これは俗に云ふ「轉ばぬ先の杖」
と云ふことで。やゝもすると無常迅速と云ふことを云ふと。若
し人達は佛法では死ぬく〜と云ふさかい變な氣がすると云ふか
もしれぬが。死ぬと云ふたゆへ死ぬ。死なぬと思ふてれば死
なぬと云ふ人間の命でもあるまい。云ふても云はいでも前生か
ら定れる壽命なら。思ふても思はいでも一時間も伸縮はならぬ
遠き慮りなければ必ず近き憂あり。用心してれかねば後悔し

ますぞ。勿論死後の用意をしたために長き命もちいまりて早く
死ぬと云ふことはなる。火の元の用心をしたで。思ひもよらぬ
火災に値い。盜賊の用意をしたためにはからず盜難にかゝりた
と云ふ様な背理な論法はなぬ。火の元を用心をすれば火災をふ
せぎ。夜警を嚴重にすれば盜難をのがるゝであらう。然らば後
生を心にかくる人は。死をいそぐ處か。壽命をちいむる處か。
却て長命延壽の元ぢや。

南無阿彌陀佛をとなふれば。この世の利益きはもなし。
流轉輪廻のつみきわて。定業中天のぞこりぬ。
受くべき災難ものがしてやるぞよ。中天もせぬように守りてれ

るぞよ。うまいはなしぢや。求めざるに自ら息災延命。難有い
ナア。然らば無常迅速の世のならひ。草露風葉の身命とれもい
後生の一大事を心になげなされや。

二九

受け難き人のすがたに浮び来て

「受け難き人のすがたに浮び来てこりずや誰も又沈むべき」サ
ア御座の同行方。今人間へ生れたは星の中に月の出ること稀
に生れたる仕合せ事ぢや。併し只夢の浮世の此世にばかり身を
盡し心を苦しめ。飯を食ては腹をへらし。腹をへらしては又食
ひ。夜ねては朝れき。はてもなることばかりにて一生を過し。
「世の中は食ふて籍してねて来きて。さて其あとは死ぬるはか

りぞ」と誰やらの詠せし如く。空しく地獄へ落込んで。二度
取かへしはならぬ程に。人間に今生れたこそ幸ひ。「人間は事の
縁なり」とて。鬼になるも人間から。佛になるも人間から。人間
から何にでもなれる身を以て。今結構な易行他力の彌陀の本願
にあふこそ幸ひ。取急いで信心を領解し極樂往生の身とならね
ばならぬことである。

三〇

聞度にめづらしければ杜鵑

「聞度にめづらしければ杜鵑いつも初音のこゝちこそすれ」と
は源の俊頼朝臣の詠せられたる歌にて。四月五月頃になく杜
鵑は詩人や歌人俳諧師などは皆珍重して之を聞く。京都東山や

東京の芝や上野の繁華な處でさけ澤山に鳴く鳥なれば。さのみ
 珍くは無い筈なれども。兎角に聞く度び毎に人が珍重をする
 彼の百人一首の中に徳大寺左大臣の歌に「ほゝとぎす鳴さつる
 方をながむれば只有明の月ぞ残れる」と詠せられ。又「一聲は
 月が鳴いたか時鳥」なごゝ何れも昔より珍しそうに歌や發句に
 詠んである。物事は何によらず珍重すれば其物が自然心に貴く
 れもわるゝもので。容易の思ひをなさぬと云ふ今の歌の意ぢや
 今説教も其通りで。今日も亦平常の安心の話か。珍くもなる忠
 君愛國の教へか。又未來後生の相談か尋常の茶漬の様にこゝ
 ろうれば。大切なる法門もつい軽々しくなるものゆへに毎度聽

聞いたせごもいつも初耳のつもりになりて聞てもらいたいもの
 ぢや。

三一 陰其樹者不折其枝

「陰其樹者不折其枝」。夏の頃道にあるいてヤレ熱やこゝ
 で一ト休みと樹蔭によりて休む時には。此木がありたればこそ
 と恩を思ふて必ず其枝を折るなど。韓氏外傳と云ふ書物の中に
 は教へてある。これからみれば今銘々は祖師聖人の御流れを汲
 んで。彼尊の御門下とあるからにや。差當りて御恩を思はねば
 ならぬ。家のなる乞食非人。宿なしの雲助ならばいざしらす。
 三疊敷でも家もつたものは。宗旨なくては天が下の住居はなら

ぬ。然るに代々淨土眞宗。御開山様の御門徒と云ふて其御影を蒙るからには。そればかりでも御恩をしらねばならぬ。

三三 淺間しや思へば日々の別れかな

「淺間しや思へば日々の別れかな昨日も今日に又もあわねば」。或人澤庵和尚に尋ね問はるゝには。人間萬事何事もつねの業となるもの。兎角に退屈の起りて懈怠になりやすきものなれば何卒其懈怠を策勵して退屈のれこらぬ方術があるならば示し給はれと申されたれば。其時澤庵和尚の取りあへず詠せられたが此一首の歌である。なるほどこれは面白い御諭しの詞にて。今年今月今日は。過去久遠劫の昔から未來永々劫の末に至るも二

度とはなる。其日々々が生涯にたつた一度と思へば。一時間一分間も龜末にはならぬ。かく思ひついで勉強すれば。自ら懈怠退屈はれこらぬと仰せられた。御教化を聽聞するには尙更此れもいをはなしてはならぬ。今日きかすは明日明日きかすは明後日と。重い後生のかるはづみ。短い命に長綱引いてれるからいつも馬の耳に風同様な聽聞になるのぢや。知らぬ昔は致方はなるが。今日より後はと心を入れかへて大切に聞うぞや。

三三 莫道老來初學道

「莫道老來初學道古墳多是少年人」とは名高い白樂天の詩である。これは如何なる心であるかと申しますと。御互に若い間は

自分々々の職業にれいまわされて忙しいものですから。御法話の席へ出ると云ふ様なことはマア、年老て後の隠居仕事の様
に思ふてれるものが澤山にあります。これは甚だ間違ふた考へ
へと云はねばならぬ。何故かなれば「古墳多是少年人」で昔
からの墳墓は少年の人が過半数を占めてれる。其數多き墳墓の
主たる少年の人が。皆老來初めて道を學ぶと云ふ様な考へを持
て居たならば。夫こそ大變な間違で。遂に一句の御化導さくこ
とも出來ずして。空しく醉生夢と云ふ様なはかなき生涯を送り
たであらう。斯の如く我々は何時無常の風に誘はれるやもしれ
ぬ露の命を持てられますから。自分々々の爲すべきこと。又爲

さねばならぬと考へたことは。一日も片時も急いで之を實行し
他日の悔なき様に勤めねばならぬと云ふ詩の意である。今此席
へ御集り下さいまして御聽聞をなさる皆様方も。ドーカ此考へ
忘れぬ様。無常を引よせて聞いてもらいたいことである。

三四 短綆不能汲深泉

「短綆不能汲深泉」と云ふ先徳の詞がある。いかにも其通
り深い井戸の中に清い冷水のあるのを。盛夏極暑の頃一杯く
で呑み度ひと立寄りてみても。肝心の釣瓶繩が短ふては其井戸
の水を汲み上げて呑むことはならぬ。今聖道の法門は其教へ甚た
深く。末代の我々は智慧の釣瓶は短かし。八家九宗の深い泉を

のぞんだ處が。自力ではとても眞如の法水を汲み取ることが出来ぬゆへ。そこを御文に「末代我等ことき在家止住の身は聖道諸宗の教にればねばそれを我たのます信せぬばかりなり」と仰せられた。爾らば八家九宗と薨を并べた聖道諸宗の御教への利益にもれた。下根の我等が助かる御法は御座りませぬかと申せばイヤ／＼あるとも／＼きつと助かる法がある。其助かる法と云ふは彌陀の本願南無阿彌陀佛ぢや。

三五 心の聾盲

「豈惟耳目有ニテナラシヤ。聾盲一哉心ニモ亦有之」と莊子の中にあるが如何様ぞうぢや。嬰兒の時に疝を病らうとか。或は癩瘡が目に

入りてさつぱり見ぬ盲目となり。又若い時に梅毒にかゝりて揚句のはてに聾になり。生れもつかぬ片輪となりて。不自由な人が澤山あるが。併しこれらは皆すがたかたちらの聾盲そればかりぢやない。心にも亦これあり。聖賢の教を聞いても信ずる心なく。又聖賢の道を顯はす書物は眼にさらしても。心に用ゆる想ひのないのは。たとひ六根具足の人でも。心の盲心の聾。仕様のない片輪者ぢやと云ふ。今例して云ふと。

大聖易往ととき玉ふ。淨土を疑ふ衆生をば。

無眼人とぞなづけたる。無耳人とぞのべ玉ふ。

若不生者の誓約たがわす。十劫の曉天。我等凡夫の往生を南無

阿彌陀佛に成就して。立向ふて下された大悲の御相を拜んでも心に尊む思ひもなく。たのむ一念の領解一つで助けるぞ救ふぞの彌陀招喚の勅命。毎座々に聴聞しながら。さらに信ずる想ひのないのは。取も直さず生盲闍提の片輪者ぢや。片輪と云はれて悔くばごうぞ大切に聴聞して下され。

三六

夢ぞかしたとへばねもうあらましを

「夢ぞかしたとへばねもうあらましをかなへたりとも幾程の世ぞ」と古人も詠じられたが。此世は實に夢ぢや幻ぢや。思ひの儘に榮耀榮華をさわめてみても。何時までながらへる命ぢや。三井も鴻池も羨しきことはない。皆もろともに死にゆか

ねばならぬ。百萬圓の財産家も死出の旅路は丸裸。そこを思へば此世はながらへ度うてもながらへられぬが定りなれば。祈りても死ぬ願ふても死ぬ。それゆへに此度は死なぬ證りの極樂へ往生をさげさせてもろう身になれよと御教へ下さる御教化である。

三七

立ならぶ甲斐こそなけれ櫻花

「立ならぶ甲斐こそなけれ櫻花松に千歳の色はならはで」櫻と云ふものは誰が詠めても奇麗なものであれど。僅な嵐につれられてツイバラくと散りてしまふ。松と云ふものは別に奇麗なことはなけれとも。千歳の齡をたもつ常盤木ゆへに。青々とし

て詠めあかぬと云ふ歌の意。今御座の同行方。一同に念佛稱ぶる相たはとんと御法義の花盛り奇麗なことちやが。御慈悲の頂かれぬ人々は櫻の花と同じこと。聞くばかりの心中ゆへ御堂を出ると其花がばらりと散りてしまふ。五欲の嵐はふき通しちやで。堂座の花はすぐに散ります。又御慈悲頂いた人は常盤木の如くちや。ほしやれしやの其中から。金剛の信心はかれらにもさわれず。いつも相續の出来るのであります。

三八 如蟻子登高山

「餘門學道。如蟻子登高山。念佛往生。似風帆行順水。」小
さな蟻が大きな高山に上るには。なかく大體なことではない

聖道自力の致へも其通り。證りの絶頂へはなかくなみや大體では登らるゝことではない。帆かけ船が風に順ふて波の上ゆくとこれ程な早い結構なことはない。今阿彌陀如來の本願他力をたのむ同行も其通り。自力修行の足手はこばす。やすく極樂淨土の湊入りをさせて下さるゆへ。早く取り急いで他力の信心を決定し往生淨土の仕合せを待ちうけねはならぬ。

三九

月影の至らぬ里はなけれども

「月影のいたらぬ里はなけれども詠むる人の心にそすむ」八月十五夜の御月様。世界國中ごこのごこまでもへだてなく御照しなれども。戸をしめてねてれる者は其明月のあざやかなも知ら

ずになれる。すりや明月も何の所詮もない。ア、同行方残りれ、
 いものぢや。イヤこれ外の事ぢやない。阿彌陀如來の正覺御成
 就の明月は十方衆生と御照しなれども。疑の戸をしめて妄念煩
 惱の高枕。大様懈怠とねて居るものは。かゝる尊き易行他力惡
 人女人其儘御助けも所詮はなひで。年に一度の明月ならながめ
 て賞翫するがよい。流轉輪廻の迷ひの中に。二度とあはれぬ彌
 陀の御助け。難有い仕合せと。はやく疑の戸をあけて御助け
 たしかな御慈悲をよろこばれよ。

四〇 莫大於飢渴

人於ケル身ニ以テ日ヲ言ハシ。之ヲ莫シ大ナルハ於飢渴ヨリ必ス爲ニ飲食之備ラト

龍舒の淨土文と云ふ書物の中に示してある。此文のこゝろは人
 間一生の間に毎日の三度の食事程大切なものはないと云ふこゝ
 ろぢや。これは今日富貴に暮す人は御存知あるまいが。裏屋小
 屋の其日ぐらしの貧乏人が。不時の病氣や非常の火災にても逢
 ふて。たよるべき知己もなく。朝中飯は近所隣りのなさけに
 て。ごうかこうかたべたれど。晩の用意にあてがなければこれ
 程心配なことはない。見かける處が此參詣の衆中には。三度の
 食事にこまる御方はあるまいが。扱聞てもらうは爰の處ぢや。
 凡そ貧乏と云ふに二た通りありて。一生生活の金錢に乏しい
 と。只浮世一生の貧乏にてわづかの間の旅の假り寝の夢同様ぢ

やが。各々方。六道生死の永がの貧乏をせぬ様に覺悟をするが肝要ぢやぞ。

四一 上士聞道勤行之

「上士聞道勤行之。中士聞道如存。下士聞道大笑」とは、老子經第四十一章の御言である。今も古も貴き法を聞いて勤めて之を行ふは難いことと見ゆる。今遇ひ難き佛法に遇ひ信じ難き念佛の法門を信じて。未來後生の一大事を決定せらるゝは實に多生の大事と申すものぢや。

四二 行末の思ひにぬる袂かな

「行末の思ひにぬる、袂かなあはれはかなき道柴の露」。ア、同

行衆行末を思へばマアあわれなことぢや。そうた夫も可愛い妻も慈悲な親でも孝行な子でも。何れ別れの涙はやがてぢやと思ふぞよ。あたまのさらやすねのさら。終には野邊の燒物となる白骨を形見に残すは今ぢやぞやく。そこを思へば取急いで後生の一大事。速かに他力金剛の信心を決定し。往生治定の身となられよ。

四三 相逢相値皆有因縁

相逢相値皆有因縁」と。釋迦如來は御説きなされ。見る顔も見らるゝ顔も過去の因縁前生の約束。世間の顔にも「袖の振合ひ多生の縁」と云ふ處ぢや。袖の振合ひするも一世や二世の縁で

はない。多生の縁とて生れかわり死にかわりした間より結ぶ因縁途中へ道つれの人に煙草の火を借りたり貸したりして。一寸すひ合ふ煙草さる皆因縁事ぢやとあるものが。況んやこれ同行方。後生の親様と先祖代々御敬ひ申して。我家々々の御佛檀に安置した阿彌陀如来。朝夕南無阿彌陀佛々々々と御敬ひの御縁も前生より結ぶ御縁の今顯れた仕合せ事ぢや。また其上に御手次の本堂へまいり拜み奉るは。袖の振り合ひや煙草の火を借る位の假染のことではない。目に拜んでは後生御助けの親様と御敬ひ申し。耳には五劫の御思案兆載永劫の御苦勞下された本願成就の御ゆはれをきく。口には願行成就の南無阿彌陀

佛を稱ふるは。偏に多生の縁のしからしむる處なりと仰せられてある。

四四 岸崩花逆咲

「岸崩花逆咲石推筍斜生」。岸の崩れた處でも咲くべき花の因さねあれば。つゝじの花は倒様になりても咲く。石かけのくづれた間にでも。出づへき竹の根さねあれば。いがみなからも筍ははねる。世話しく暮す世渡りの其中からも。信心の因さね頂けは南無阿彌陀佛の花が咲き。ほしやれしやもやまねども。御慈悲の根さね堅ければ。報謝稱名の筍ははねるのである。今此御座は其信心の根をかためてもらうのが第一の所詮で